

『古事記』隠伎之三子嶋の地名起源 (二)

——並びに「雙生億岐洲與佐度洲」(『日本書紀』)の意味——

服部

旦あさけ

目次

はじめに

一 島根半島陸上からの「三子」・「双子」の景観追跡

『大妻女子大学紀要—文系—』第35号掲載(前編(一))

以下本号掲載

前編(一)の誤植等訂正

二 鳥取県西部沿岸陸上からの「三子」・「双子」の景観追跡

三 島根半島沿岸海上からの「三子」・「双子」の景観追跡

四 地蔵崎島前間航路上での「三子」の景観追跡(一)

——B論文の修正と再確認——

五 地蔵崎島前間航路上での「三子」の景観追跡(二)

——前章追跡の再検討と再確認——

六 島根町野井漁港島前間海上での「三子」(・「双子」)の景観追跡

——『風土記』の官船航路を考慮しつつ——

七 「三子」の景観追跡(第1章(第6章)小結

八 隠岐海峡に於ける古代の舟運

附 地図(1)～(5)、図(1)～図(35)(第1章(第3章)使用分)

次号に続く

前編(一)の誤植等訂正(誤↓正)

2 ペ図(ア) E千酌↓E千酌

4 ペ上段8行目 三子島↓三子島(マ)

14 ペ上段12行目 平成五年↓天平五年

15 ペ上段2行目 秋本吉郎ノ行ヲ1字サゲル

19 ペ上段3行目 埋蔵文化財課長↓文化財課長

19 ペ上段25行目 島根県教育委員会↓島根町教育委員会

地図・図面・写真の掲載方針変更についてのお詫び

私は前編(一)(前号第1章論文の略号。以下同じ)に於て、「本号の図(ア) (イ)・カラー写真以外の図面・地図・写真は、総て最終巻の巻末に掲載する予定である。」(5ペ上段2行目(3行目)と予告した。しかし、「本文と地図・図面とを照合しつつ読み進めないと論証が理解できない。」という感想が寄せられたため、研究の全般に亘って使用する地図(1)～(5)を本号の巻末に纏めて掲載する。第1章(前編(一))から第2章(第6章(本号))で使用する図面は、図(1)～図(70)である。しかし、これを一挙に本号に掲載すれば私の論文の分量が突出することになる。そこで、中途半端となるが、第1章から第3章に使用する図(1)～図(35)

を本号の巻末に掲載し、残りを本研究の完結する次号の巻末に掲載することにする。写真については、本文の論証に最も近い箇所に掲載する。当初は、地図・図面・写真を別冊として、論の進行と共に参照して頂くのが便利と考えたのであったが、至らざる配慮により却って不便と混乱を招くことになってしまった。謹んでお詫び申し上げる次第である。

二 鳥取県西部沿岸陸上からの「三子」・「双子」の 景観追跡

私はこの研究のために、鳥取県西伯郡の大山(標高1700.43m)⁽¹⁾とその中腹の榊水高原(日野郡溝口町。標高872m)⁽²⁾からの景観を得ようと、昭和60(85)年8月以来機会を待っていた。しかし、平成14(02)年8月までの間大山頂上に1度登り、榊水高原には、8度夏期に鳥根半島から大山の見えた時に直行したが、1度も隠岐を見る事ができなかった。これは、距離(大山頂上まで鳥根半島東端の地蔵崎から直線で約31km・知夫里島東南端からは約82.8km)上の問題だけでなく、大山の(北側)山腹一帯は(夏期の?)晴天時に薄く霧が掛かる地勢にあることも原因しているようである。大山のみならず、沿岸部の西伯郡淀江町・大山町・名和町海岸からも、鳥根半島部に比べると隠岐島の遠望は利かない。3町は地蔵崎から直線で約15kmから17km離れただけであるが、それでも格段に悪くなる。この差は地図上では想像しにくい。そこで、淀江町小波在住の遠藤師夫氏(昭和10(35)年生)に平成11(99)年10月に鳥取県西部沿岸からのスケッチをお願いした。遠藤氏は各地の知人にも依頼して下さったが、9ヶ月待っても機会に恵まれない、とのことであったため、私は意を決して、平成12(00)年7月隠岐島が見えるまで西部海岸に滞在するつもりで出掛けた。幸運にも、鳥根県松江市に着いた翌日の7月28日午前JRの淀江駅を出た車窓から、臆げではあったが島前を見、急ぎ下車して各地点からスケッチを

することができた。同日と後日に遠藤氏もスケッチして下さった。さらに、大山町内の鳥取県教育委員会妻木晩田遺跡整備室現地事務所の内田浩文氏から写真と同遺跡関連資料をお送り頂いた。私の現認スケッチも、述べたような鳥取県側からの見通しの悪さのために不完全なものである。しかし、遠藤氏と内田氏による記録を合わせればほぼ判断ができると考え、ここに発表する次第である。第1章(前編(一)・本紀要前号)に「鳥影の比定は、鳥根半島側、隠岐側の住民に尋ねても自信を持った回答はなかなか得られなかった。」(8ページ下段14行目〜16行目)と書いたけれども、今回3次元地図ソフト「カシミール3D」を鳥根県中山間地域研究センター主任研究員森永壽氏に操作して頂き、参考資料とすることができた。その結果は、本文と掲載図面に記す。森氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献は、前編(一)と同じく本号巻末に纏めて掲載し、本文中には著者名・西暦・引用ページを略記する。

(1) 淀江町、妻木川川口右岸(地図126・図28)

鳥取県淀江町今津の妻木川川口右岸からのスケッチである。文化庁(2008)地図5)は、スケッチ地点から西方約642mに「安原遺跡 散布地」(大山町安原孤塚)を記す。このスケッチは、第1章第19節(前編(一)12ページ。図28)の鳥根半島東端地蔵崎でのスケッチを行なった後タクシーで直行した時のものである。図28の時は曇天で隠岐に雨雲が掛かることはあったが、比較的細かくスケッチできた。しかし、その40分後の妻木川川口からは、天候の悪くなったことも加わり極めて見えにくくなっていた。図28は、雨雲の切れ目から時折見えた鳥影をスケッチしたものである。「カシミール3D」(以下、カシミール)では、Cは西ノ島の高所で、中ノ島は水没する。また、カシミールではA・B間が水平線上に辛うじて繋がりが、Cの右側にもかすかに陸地があることになる。しかし、以下に述べる如く、実際にそのように見えることがあ

るとしても、それは余程の好条件下のことであろう。

ともかく、この時の島影はA・B・C・Dの三つに見えたが、三者には量感に大差があり、加えてDの島後も遠く、三子の印象はなかった。また、島前のAとB・Cは一体化せず、Dも遠いから、双子の印象もなかった。

(2) 大山町、末吉海岸（地図(1)27・図(29)）

大山町末吉集落西はずれ農道上からのスケッチである。文化庁(1988)地図5)によれば、南西約286mに「末吉遺跡 散布地」(大山町末吉宮原)、東北東約571mに「国信古墳群 古墳群(円)」(大山町国信)がある。前者は、大山町(1991・2)によると、弥生時代後期(から古墳時代にかけて)の遺跡である。

このスケッチは、本章冒頭に記した、平成12(00)年7月28日私が鳥取県側から初めて隠岐を見ることができた時のものである。前日の7月27日に、荒谷建設コンサルタンツ鳥取支社副社長の原田潤氏より、島前が本土の海岸から三子に見える最も可能性のある地点は末吉附近であろう、とのご教示を得ていたため、此処に直行した。当日は快晴で陸上での見通しは良かったけれども、遠方海上は水蒸気で霞み、双眼鏡で眼を凝らしようやく描いた。他のスケッチと比較して見ると、Aが知夫里島らしく(カシミールでは知夫里島となる)、Bが焼火山、Cは中ノ島か、中ノ島が水没して後方西ノ島の高所が見えるのかもしれない(カシミールでは中ノ島は水没し、西ノ島の高所となる)。かような悪条件下での観察であるが、この時島前からは三子・双子の印象は受けなかった。島後は水没のためか、それとも水蒸気のためか見えなかった。このスケッチよりも2m程高い標高7mの高さからのカシミールでは、島後は水平線上に切れ切りに浮ぶ。但し、カシミールは理論上のもので、潮の干満は条件に入っていないという(森永壽氏ご教示)。

(3) 大山町、JR大山口駅ホーム上（地図(1)28・図(30)）

文化庁(2008)地図5)は、JR大山口駅附近一帯に多数の遺跡を記す。一例を挙げると、駅の南約500mに「唐王遺跡 散布地」(大山町唐王)、南西約286mに「国信第3遺跡 散布地」(大山町国信)、北東約500mに「上野第3遺跡 散布地」(大山町上野)がある。

Aは知夫里島らしく、Bの頂点が焼火山である。Cは図(29)と同じく不確かである。中ノ島もしくは、中ノ島は水没して西ノ島の高所が見えているのであろうか(カシミールでは中ノ島は水没、西ノ島の高所のみとなる)。右方にD島後がかすかに見えた(カシミールでは右(東)方も島影が続く)。水蒸気のため見通しが不十分ではあるが、A・B・C・Dで三子の印象はなく、双子の印象もない。

(4) 名和町大塚字大雀（地図(1)30・図(31)）

国道9号線に南接する標高20mの崖の上からのスケッチである。文化庁(2008)地図5)によれば、附近に「大雀1号・2号墳 古墳(円)」(名和町大塚傍原)、「大塚第1号第3遺跡 散布地」(同上)がある。水蒸気のため図(30)よりも一層見えにくくなっていた。Aは知夫里島(頂点はアカハゲ山)、Bは焼火山であることは確かだが、Cが中ノ島と西ノ島が重なっているのか、西ノ島の高所のみが見えているのか不確かである(カシミールでは中ノ島は水没し、西ノ島の高崎山(標高436.5m)付近が見えることになる)。離れて見えるDは松島であろうか(カシミールでは松島(前編)2へ図(7)K。標高126.4m)は水没する。そして、中ノ島の東北部の唯山(標高285.5m)附近が見えることになるらしい)。Eの島後は、カシミールではさらに右方に大満寺山方面が続いて見えることになるのだが、この時の観察ではこれが限界であった。

図面上では、A・B・C・Eで島影が三つとなるように見えるかもし

れぬが、実際には三者は離れており、加えてE島後は遠く存在感が薄れるため、三子の印象はない。双子の印象もない。

(5) 名和町富長、国道9号線(地図(1)31・図(32))

前節図(31)・地図(1)30地点の東北東約240m、国道9号線沿いの日本料理屋「あんこう」の土手標高約10mからのスケッチである。文化庁(1983)地図(5)によれば、附近に「富長古墳群 古墳群(円)」(名和町富長・「富長第1・第2遺跡 散布地」(同上)がある。

この図は、淀江町在住の遠藤師夫氏が、私が図(31)をスケッチする約3時間30分前に駆けつけ、肉眼によりスケッチして下さったものである。図(31)よりも海上の見通しが良かったらしく、D島後の島影が大きい。島影の比定は、服部による。Aは知夫里島らしく(カシミールでは知夫里島)、Bの左端の高所は焼火山であろうが、それ以外は西ノ島と中ノ島が重なっているのか否か詳細は不明である(カシミールでは両島は重なり、Bの右端の最高部は西ノ島の高崎山となる)。遠藤氏は、Cを「島影」と言われ、「Cの右にもかすかに島が見えた。」と言われたから、私はCが松島で、その右に見えたとするのは大森島(前編(一)2ペ図(7)J。標高1548m)かと思った。しかし、カシミールによれば、Cは中ノ島の高峯(標高2039m)・家督山(標高2462m)附近が見えていることになる。Cの右にも見えた島影というのは、カシミールでは中ノ島の角山(標高1262m)・唯山(標高2655m)・熊野山(標高1475m)・金光寺山(標高約140m)附近となる。遠藤氏に予め拙稿B論文をお渡ししてあったが、三子・双子の印象については、「意識して見ていなかったため判らない。」とのことであった。

(6) 名和町御来屋、御来屋展望台(地図(1)32・図(33))

国道9号線から北に入った、御来屋の海岸集落に南接する台地上に

設けられた展望台(公園)からのスケッチである。文化庁(1983)地図(2)によれば、附近に「小塚原古墳 古墳」(名和町御来屋小塚原)がある。

この日最初のスケッチである図(29)の時刻から1時間55分が経過したため、水蒸気によって見通しが一層悪くなっていた。Aは知夫里島のアカハゲ山、Bは焼火山である。Cは西ノ島のみなのか、中ノ島も重なるのか不確かである(カシミールでは中ノ島は水没、Cの頂点は西ノ島の高崎山となる)。この時、島後が特に見えにくくなっていた。Eは島後の一部のみが見えているようである(カシミールでは、Eは島後西部の横尾山(都万村に属す。標高5383m)を頂点とする一帯に当たるか)。図(32)(34)を参考にすると、気象条件が良ければEの右方に島後の東部大満寺山(西郷町に属す。標高5071m)を頂点とする一帯が見えるかもしれない。このように余り良好な条件下ではなかったけれども、A・B・C・Eの三つで三子という印象はなく、また、双子の印象もなかった。

(7) 大山町長田集落入口附近(地図(1)25・図(27))

第1節から第6節までは海岸部沿岸からの景観であった。以下第9節までは若干内陸部に入った、これまでよりも標高の高い地点からの景観である。図(27)は、大山町長田集落入口より北西に約100m下った、標高75m地点からのスケッチである。文化庁(1983)地図(5)によれば、長田一帯は古代の住居地である。即ち、「長田第1」(第2、第3・第4・第5・第6・第8・第10遺跡 集落跡)(大山町長田松尾頭、石田・清水・大新田・上玉谷・若林・松尾頭)、「長田古墳群 古墳群(方円・方アリ)」(松尾頭)、「長田第7・第9遺跡 散布地」(宮の谷・若林)がある。

図(27)は、鳥取県側で隠岐を初めてスケッチできた図(29)の40分後のものである。海岸から約3.5km南方に入っただけで見通しが悪くなり、双眼鏡を使用しても島後は見えなかった(カシミールでは見えることに

なる。標高が75 mまで上ると、図のように島前は一つの島に見える。Aの頂点が知夫里島のアカハゲ山、Bは知夫里島の東南端から東へ1.2 km離れた大波加島(標高78 m)、もしくは、西ノ島浦郷(前編(一)2ペ図(ア)G)の茶釜山(標高224 m)が見えているのかと思った。しかし、カシミール(図の標高75 mよりも5 m高い地点からの)では、知夫里島の東南端の高平山(標高149 m)・大峯山(標高535 m)と茶釜山とが繋がっていることになる。Cは焼火山である。Dは西ノ島の高所が中ノ島と重なっているように見えた。カシミールも同じで、Dの頂点は西ノ島の高崎山となる。Eは霞んで明瞭でなかったが、中ノ島の東北部、もしくは中ノ島と西ノ島の東北部が重なっているのではないかと思った(カシミールでは両島が重なり、Eの高所は中ノ島の高峯と家督山が連続する)。悪条件下ではあるが、長田からは島前が3島になり、三子に見える景観は得られなかった。また、双子にも見えなかった。島前と島後とで双子に見える可能性については明言することができない。カシミールでは、島後が水没せずに一続きになる。しかし、遠近感を表現していないため、双子の景観の参考にはできない。

前節の御来屋での観察後、これ以上は見通しが好転することは期待できない、と判断してこの日のスケッチを打ち切った。その後も隠岐が見えるのを待って滞在を続けたが、結局この7月28日以後同年8月21日までの間に隠岐を見ることができたのは、7月31日の不十分な図②8だけであった。

(8) 大山町長田、妻木晩田遺跡内 1 (地図①33・図③4)

淀江町から大山町にまたがる妻木晩田遺跡は、大規模な高地性集落として有名である。弥生時代中期から古墳時代初期の遺跡で、環濠を廻らし、複数の四隅突出型墳丘墓が環濠内にある(佐古和枝〈2006:18〉)。この大集落からの眺望の経験が『記・紀』に反映した可能性はないか、大いに関心があった。平成12(00)年8月15日(快晴)島根半

島の七類(地図①19)から島後の西郷港に向かう航路(前編(一)2ペ図(D↓)の隠岐汽船「フェリーくが」に乗船し、午前9時22分北緯35°38'51.60"・東経133°15'50.40"に達した頃、島後が見え始めた。峯坂堅夫一等航海士が、「今日は久々に隠岐が良く見えます。」と言われた。そこで、すぐに電話で遠藤師夫氏に鳥取県側からのスケッチをお願いした。遠藤氏は早速妻木晩田遺跡に駆け付けて下さったけれども、隠岐島は見えなかった。そして、翌平成13(01)年8月31日になって、「ようやく1年振りに隠岐が見えました。」として送って下さったのが、この図③4である。平成11(99)年10月に名和町、御来屋漁協の西村宏氏(昭和18(43)年生)から、「隠岐は雨上りの日に見える。」と伺っていた通り、図③4の前日は雨天であった。

妻木晩田遺跡の最南西地点(洞の原地区内)からのスケッチである。標高90 m地点の一カ所からは島後の全部が見えないため、標高75 m地点に降りて2カ所から望見して合成した図、とのことである。合成であることと、島後との遠近感も表現されていないことから、「参考」として掲げる。私の比定であるが、Aは知夫里島で、Bは西ノ島と中ノ島が繋がっているであろうか(カシミールでは西ノ島と中ノ島が繋がる)。AB間が切れて見えるのは当日の気象のためであろうか(カシミールでは繋がる。次節図③5参照)。遠藤氏は、「三子・双子の景観については意識して見なかったため、判らない。」と言われる。

(9) 大山町長田、妻木晩田遺跡内 2 (地図①33・図③5)

鳥取県教育委員会妻木晩田遺跡整備室現地事務所の内田浩文氏より、平成13(01)年11月21日と12月19日に洞の原地区の諸地点より撮影した写真(デジタルカメラ)の焼付をお送り頂いた。図③5は洞の原地区の北部標高90 mからの景観である。焼付写真に添附された内田氏の説明に、「はっきりと隠岐島を見ることができましたが、写真に撮ってみますと霞んでしまつて何を写したのか解らなくなつてしまいました。

やはり人間の眼というのは凄いものだ、改めて感心します。」とある(平成14(02)年1月21日附書簡)。そこで、同じ写真のCD-ROMをお送り頂き、大妻女子大学メディアセンターに於てパソコンを調節して貰い、辛うじて浮び上った島影を図化したのがこの図(35)である。

Aの頂点がアカゲ山、Dの頂点が焼火山、Gが島後であることは確実だが、その他は不確かである。B・Cは知夫里島の東南大波加島(標高78m)と竹島(標高50m)ではないかと思つたが、カシミール(標高は図(35)よりも2m低い88mで計算)では、Bは知夫里島東南端の岬の小平山、Cは小平山の北北東300mの標高100mの峰となる。Eは西ノ島と中ノ島が重なる姿ではないかと推測した(カシミールでも同じ結果となる。即ち、Eは中ノ島東南、知々井の熊野山(標高1153m、附近となる)。Fを松島と推測したが、カシミールでは中ノ島北東端、豊田港の東南500mの高所(標高160m、地名カメダカ(漢字不明))となる。Hはカシミールでも大満寺山となる。

前節の遠藤氏のスケッチ後このように2回は見えたのだから、年に幾度かは隠岐を見る機会がありそうである。

三子・双子の印象について内田浩文氏にお尋ねしたところ、「島前の方が濃く、島後は淡かった。両者は対等の量感ではなく、島前の方が少し小さい。両者の間隔は広く、仲良く並ぶとか連れ添っている、という印象はなかった。少し離れて横に並んでいる、という感じであった。」という(平成14(02)年1月ご教示)。これまでの観察に照らして、図(35)の島前からは三子の印象は受けないと推測できる。島前と島後に ついては、Gが遠かったとされるから、私の体験した航海中の景観「両者は全く対等の量感で並び、正しく『双子』であった。」(前編(一)3ペ下段22行目、23行目)という程緊密な印象はなさそうである。しかし、私の観察ではないから断定はできない。写真を図化した図(35)による限りでは、妻木晩田遺跡からの島前島後の景観に、双子の可能性を完全には否定することはできないと思う。カシミールでも両者の横幅はほとんど同じだが、島前の山々が島後に比して低いから、量感に差のあ

ることは推測がつく。しかし、遠近感が表現されないため、肯定も否定もできない。

(10) 本章の結論

以上、十分な観察記録ではないが、右の鳥取県西部沿岸と近辺からの資料からは、島前もしくは島前と島後とで三子の景観は得られない、と断言できる。地図(1)29地点は、地図(3)の、島前から出発して海上で島前が確実に三子の印象を受ける地点をア・クまで追跡し、本土に最も近いキ地点(三子の印象はほとんどなくなる)と焼火山頂上とを結んだ線の延長が本土に到達する地点(35°29'33.60"N・133°27'12.00"E、附近)である。この地図29地点に最も近い観察は、本章第2節の地図(1)27・図(29)である。しかし、前述の通りこの時三子の印象はなかった。カシミールによる、29地点に近い35°29'56.72"N・133°27'20.09"E、標高3m地点の画像では、図(29)のB・Cは繋がりが、Cは切れ切れにならない。カシミールでは潮位を条件に入れていないから参考にとしめても、拙稿B論文の「島前の三島がどれも同じ大きさに見え」島前に接近してもその「三子の感じは失なわれない。」(前編(一)1ペ上段17行目、下段7行目)に匹敵する三子の印象は、地図(1)29地点から得られないことは確実であろう。

双子については、島前島後が最も良く見えた時での実地観察を鳥取県側でしていないから断定は差し控えねばならないが、前節に述べる通り、その可能性を完全に否定し去ることはできないであろう。しかし、少なくとも私の実地観察では、島後は遠く霞むか、もしくは全く見えなかったから、鳥取県西部沿岸陸上から見て両者に距離感のあることは確実である。これは、最も良く見えた時の前節内田浩文氏の印象とも矛盾しない。

但し、名和町御来屋よりも東方に進めば、地図上では本土と島前島後との距離がほぼ同等になる地点があるように見えるから、其処から

の景観も検討する必要がある。しかし、その場合隠岐はこれまで以上に遠くになって水没する筈であるから、双子の景観に關しては断言できない。三子も同様である。繰り返し述べた鳥取県側からの実地觀察の困難さから、早急にこの結果を出すことはできない。

(11)〔補足〕鳥取県西・中・東部沿岸陸上からの「三子」・「双子」の景観追跡

そこで、森 永壽氏のご紹介による鳥取県在住の金川眞巳氏・吉田幹男氏・富長一郎氏、吉田幹男氏のご紹介による鳥取県在住の清末忠人氏のご報告と森氏のカシミールのデータとを照合しつつ推測する。以下、名和町御来屋の東方赤碕町から東へ進む。

① 赤碕町赤碕中学校・同高等学校（肉眼）

地図(1) 32（名和町御来屋）の東約13 kmの両学校（標高は孰れも約30 m）に通学していた時代、一年の内でも天候が非常に良く、しかも極めて稀な機会に何度か隠岐を見たことがある。その時には、特に意識して見ていなかったため、島前と島後に大小・遠近・濃淡の差があったか記憶にない。水平線上に二つの島が薄らと並んでいたという印象が残っている。（東伯郡東伯町逢東在住金川眞巳氏〈昭和23（48）年生、平成15（03）年8月29日）教示〉⁽⁴⁾
カシミールによれば、赤碕町の標高22 m地点からは、島前はアカハゲ山・焼火山・高崎山（西ノ島）の高所のみが見え、島後の南東部の低地は水没せずに一続きの島となる。

② 東伯郡泊村（カシミール）

地図(1) 32の東約43 km、泊村の甲亀山（標高32 m地点）⁽⁵⁾からは、焼火山の頂上部がかすかな点景となり、島後は南西から、大峯山（標高473.9 m）・横尾山（標高672.8 m）・時張山（標高521.6 m）・大峯山（標高507.6 m）・大満寺山（標高607.7 m）の頂上部のみが見え、他は全部水没する。

③ 気高郡青谷町、長尾崎（カシミール）

地図(1) 32の東約48 kmの長尾崎（標高63 m地点）⁽⁶⁾からは、島前は焼火山の頂上部のみが僅かに見える。島後は南西から、大峯山・横尾山・時張山・大満寺山・鷲ヶ峰（標高55.3 m）の高所のみが見え、他は全部水没する。

④ 「鳥取砂丘センター」（肉眼）

地図(1) 32の東約69 kmの、海岸から南に700 m、800 m離れた現在「砂丘センター」となっている標高120数mの峰の頂上（⑥よりも数m高い）から、平成2（90）年に隠岐を見た。島後は明瞭であったが水平線に近い所は霞み、水際は綺麗な線に見えなかった。島前は、その後（西）に瘤が一つ（焼火山であろう。清末氏）が見えた。島前は島後よりも西にずれて見え、同じ位の大きさの島が二つ仲良く並んでいるように見えなかった。（鳥取市元町在住清末忠人氏〈昭和6（31）年生・前鳥取県教育研修センター所長、平成15（03）年9月9日）教示）

⑤ 鳥取砂丘南方現鳥取ゴルフ倶楽部ゴルフ場（肉眼）

地図(1) 32の東約70 km。鳥取砂丘に南接する鳥取ゴルフ倶楽部ゴルフ場の標高は、100 m、150 mである。その最も高い150 m地点で、昭和41（66）年以降の秋の非常に澄み切った天候の時に3・4回隠岐を見たことがある。島影は、島前と島後の二つのブロックに分かれず、一つのブロックの中で点々と見えた。島影の数は記憶にない。（鳥取市大覚寺在住吉田幹男氏〈昭和12（37）年生、平成15（03）年9月9日）教示）

⑥ 鳥取砂丘南方現鳥取ゴルフ倶楽部ゴルフ場（肉眼）

現在の鳥取ゴルフ倶楽部ゴルフ場の鞍部の東側の高所となっている峰（標高120 m程）から、昭和45・46（70・71）年頃古墳調査中に見た。島後は明瞭であったが、水平線に接する部分は臙ろで、島後の高所が海上に浮いているように見えた。その西の後方に島前が一つの瘤に見えた（焼火山であろう。瘤の大きさは④の時よりも

大きい：清末氏。島前と島後とで同じ位の大きさの島が二つ仲良く並んでいるという景観はなかった。(清末忠人氏、平成15(03)年9月9日) 教示)

右の鳥取県在住の方々のご報告とカシミールの理論上のデータとを参考にと、地図(1)32から東方に進む程、特に標高の低い地点からは双子の景観の得られる可能性は非常に小さくなるものと推測される。また、島前もしくは島前と島後とで三子に見える可能性も同様に極めて小さいと思われる。

①⑤⑥の資料によれば、鳥取県の海岸部から島前と島後とで二つの島に見える可能性は、海岸線が隠岐に向かって北西に突出する名和町からその約5km東隣の中山町にかけてが最も大きいと推測される。即ち、島前の標高が島後よりも全体的に低いため、東に進むほど島前は水没し量感が小さくなるからである。清末忠人氏は「赤崎町・中山町からも隠岐は見え、名和町からは二つの島(島前・島後)が並んで見えますね。」(平成15(03)年9月9日) 教示)と言われる。尤も、これは余程天候条件の良い時と思われ、私の観察した名和町内の図(31)(33)では島後は臙ろに霞み、同日にスケッチされた遠藤師夫氏の図(32)でも、島後は島前よりも薄く描かれている。④⑥には清末氏の知識と観察力の程が伺われる。しかし、隠岐島について特別の関心を払わずに遠望した場合、①⑤の如き記述であり、名和町からの図(32)・大山町からの図(34)の遠藤師夫氏(淀江町在住。教職・画家)は、「三子・双子の景観は意識して見なかったため不明である。」とされる。

図(32)と同じ名和町富長の実家に4歳から18歳まで住まれ、その後再び名和町に戻られた富長一郎氏の報告は、その点で興味深い。即ち、

⑦ 名和町富長、国道9号線附近(肉眼)

JR赤崎駅に隠岐島の見えることを記した簡単な案内板があるから、名和町富長の東方からも隠岐は見える筈だが、私はまだ見たことがない。名和町富長の国道9号線附近からは、年に数回特

別に天候の良い時か、こちら側が雨で隠岐方面が晴れて明暗の差がある時に島前(？：服部)が非常に近くに見えた。しかし、この時は意識していなかったためか島後(？：服部)を見た記憶がない。隠岐が島前島後の二つから成るといふ認識は、子供時代の私にはなかった。小学校の4・5年生の頃、境港から島前を船で往復(島後には行かなかった。当時島前まで片道3時間、島後まで5時間)したことがあったが、その頃は隠岐島は一つの島だと思いついでいた。成人して隠岐が2島から成るといふ認識が出来てからの眺めがどのようなものとなるか、まだ見たことがないから判らない。(名和町富長在住富長一郎氏(昭和38(63)年生、平成15(03)年9月8日) 教示)

成人でも隠岐が2島から成ることを知らない人は案外多いかもしれない。私が前編(一)第1章第19節の地図(1)24島根半島東端地蔵崎燈台で図(26)のスケッチをしていた際、通り掛った婦人が、島前の右遠方に見える島後を指して、「あの島は何ですか？」と同行の男性に質問していた。

つまり、名和町からは島前と島後との間隔が大きく開いて見えるため、富長氏のような認識が生まれたのであろう。遠藤氏の「三子・双子の景観は意識して見なかったため不明である。」というのも、そうした印象が薄かったことを暗示するのではないか。

(12) ドッサリ節の「島が四島」の検討

最後に前編(一)「はじめに」の、山田弘通氏が「隠岐が四島に見える所があるようです。それはドッサリ節に『大山お山から隠岐の国みれば島が四島に大満寺、中の小島、に長者ある』(前編(一)4ページ10行目(13行目)とあるため、とする推測は、右述の私・遠藤氏・内田氏・第11節の記録では否定せざるを得ない。前述の通り、私には大山頂上と中腹から隠岐島を望見した経験がない(本章冒頭)ため、カシミー

ルを参考にすると、次の如くである。即ち、大山頂上（標高1711m）からは島前と島後とで2島に見え、間に松島と大森島がかすかに浮かぶ。榑水高原（標高874m）からは、大山頂上からよりも島前島後は若干水没して島影が低くなる。そして、松島はかすかに水平線に浮かび、大森島は頂上部のみが点景となる。計算上の画像ではあるが、隠岐島が大きく4島から成るといふ景観は、肉眼でも恐らく得られないであろう。ドッサリ節の「島が四島」は、隠岐に居住したか訪れた者の知識に基づき、「大山お山から隠岐の国見れば」は、空想によるものであろう。B論文（10ページ目）の行目。私の経験は知夫里島から）でも述べた如く、隠岐島からは大山が良く見える。そこで、大山に登って隠岐を見下したような気分で作詞したものと思われる。

注

- (1) 鳥根県中山間地域研究センター研究員有田昭一郎氏のご教示によれば、平成12（00）年10月6日の鳥取県西部地震により頂上が崩壊し、最新の標高（弥山）は1709.43mである（最高峰は剣ヶ峰の1729m）。
- (2) 注(1)有田昭一郎氏が溝口町役場に照会して下さったところによると、872mは、榑水高原スキー場最高地点の標高である。この872m地点には、大山の西側中腹を繞る林道が通っている。この林道附近から私は隠岐島および島根半島の撮影を何度も試みた。しかし、最も見通しの良かった平成2（90）年8月18日（この時には炎天が長期に亘ったため、水蒸気が乏しくなっていた）でも、島根半島部は平田市附近（約63km。市街地の明確な視認はできず、地形（国引き神話「去豆乃折絶」）から推測）が限界であった。
- (3) <http://www.kashimir3d.com>・杉本智彦（2002）。
- (4) 35°30′30.94″N・133°39′07.88″E
- (5) 35°30′52.50″N・133°56′54.38″E
- (6) 35°31′56.25″N・134°00′37.13″E
- (7) 生物分類学を学ばれ、鳥取県立博物館に勤務された関係で考古学の調査にも関与された。平成15（03）年9月倉吉短大非常勤講師ご退職。
- (8) ドッサリ節の起原について、知夫村（1997：246）は「知夫里お松と、

松前船頭の恋物語から、追分節の変形と見るべきが自然」とし、近藤武（1984：20～29）は越後国の新保広大寺節を起原とする。元節・元歌の問題はともかくも、ここでは山田弘通氏の取り上げられた歌詞の部分に限定して論ずる。

三 島根半島沿岸海上からの「三子」・「双子」の景観追跡

第1章・第2章に記述した如く、隠岐島の景観は、見る位置の標高により大きく変化した。三子嶋が「島根半島から晴天日にみえる島前三島の印象に寄るのではないでしょうか。」という山田弘通氏の推測（前編(一)4ページ目・11行目）は、少なくとも島根半島からの私の観察では裏づけられず、念のため鳥取県沿岸部からの観察も行なったが、こちらの可能性も極めて低いということが明らかとなった。

山田氏は島根半島のどの地点からの島前三島の印象であるかを述べておられないため、本章では第1章で行なった島根半島陸上部での追跡をさらに進めて、島根半島沿岸部の海上からの景観追跡を行なうことにする。特に古代人の体験に近付くため、海上での低い視点からの観察でどのような景観となるかを検討する。また、拙稿B論文の考察は、美保関の地蔵崎から島前三島の内海に焼火山を航海目標として向かう航路上（前編(二)2ページ目(C)↓G）に限定していたから、この航路上以外にも三子・双子の景観が得られるか否かを検証する。さらに、島根半島沿岸に限定せず、島根半島から島前に向かう漁船上からの観察も行なったが、その結果は後述する（本号第6章）こととし、本章では島根半島沿岸部での観察に限定して記述する。使用した漁船は、島根町大字野井160番地在住渡部弘美氏（大正14（25）年生）の弘進丸（海面からの甲板の高さ、約0.4m）と、美保関町大字雲津17番地故舩岡豊吉氏（大正15年生・平成14（02）年没）の豊漁丸（同約0.8m）である。私の座高（眼の高さ）0.8mを加えたのが、高度となる。地図(1)に記入した

6地点(5・7・9・11・22・23)は、調査当時携帯用のGPS(全地球測位システム)がまだなかったから、凡その位置となる。

(1) 島根町大字多古、多古鼻沖合(地図15・図5)

島根半島最北端の多古鼻燈台の北北東沖合470mの地点からのスケッチである。次節の図(7)よりも島前に近付いたため、図(7)では分かれていたABCが繋がって一体となる。図(7)の三子の印象は、意識的に見ようとするれば見える、という程度のものであるが、この図(5)では一層三子の印象はない。しかし、同時に、ABCとD島後とで「双子の印象あり。」と野帳に記している。第1章の結びに双子の印象について、

島根半島陸上からは島後の島影が薄く、見る場所の標高が低ければかなり水没し、航海中に見た時のような島前と対等の量感で並んだ時と同程度に感じたことは一度もなかった。ただ、第15節 笹子での「意識的に双子として見ようとするれば見える。」(野帳)

と第19節地蔵崎燈台下での観察時、私が意識的に眼を凝らしたために「島後は遠いが双子に見えないこともない。」(野帳)があるだけである。(前編(一)下段10行目、16行目)

と書いたから、この図(5)の時には気象条件が良かったのかもしれない。

(2) 島根町大字多古字沖泊、小鶴島(地図17・図7)

前節と同じく、弘進丸で野井の港から多古鼻の西200m沖にある六島モツスマに向かう途中に見た島前である。私は予め渡部弘美氏に「三子の景観の調査をしている。」と言っていたため、同氏に「あれで三子に見えるませんか。」と言われてスケッチをしたのがこの図(7)である。Aが知夫里島(カシミールでは西ノ島)の西南部で、Bのアカハゲ山との間が水没のため切れている。BCが一体となり、D中ノ島の間が切れている。3島にはなるが、A・DがBCの量感よりも遙かに小さいから、

島前に向かう航路上で受けるのと同じような三子の印象ではない。意識的に三子に見ようとするれば見える、という程度であろう。島後はこの時見えなかった。

(3) 島根町瀬崎、松島南西海上(地図19・図10)

『風土記』の松嶋に該当する松島の南西約50mの海上、弘進丸からのスケッチである。知夫里島(カシミールでは西ノ島)のAが分かれて見え、知夫里島のBがC西ノ島と一続きとなり、中ノ島(と西ノ島の高所?カシミール)のDEFに分かれて島前が五つに見える。三子の景観はない。晴天であったが、島後は霞んで不明瞭のためスケッチできなかった。

(4) 島根町大字野井、梶島附近(地図111・図12)

拙稿C論文70へ地図(一)W梶島には、南北に貫通する洞窟(同74へ写真(1)E・79へ写真(1))がある。この洞窟を弘進丸で北に抜けた時に見た隠岐である。図(10)よりも東へ1.5km離れると、島前は若干水没する。島前は五つに分かれ、E島後は中間が切れ切れに見える。Eの右端の最頂点が大満寺山であろうか。三子・双子の景観はない。

(5) 美保関町大字美保関、軽尾沖合(地図122・図24)

島根半島東端に近い軽尾(カキビ)の北北東1.2kmの海上、豊漁丸からの景観である。島前は、C中ノ島がほとんど水没している。Cは図(23)(C・D)のカシミールを参考にすると、中ノ島ではなく、西ノ島の高所が見えている可能性がある。三子の景観は得られない。野帳では「双子の印象なし。」とする。

(6) 美保関町大字美保関、早見ヶ鼻沖合(地図(1)23・図(25))

島根半島の東端早見ヶ鼻の東北東約550m地点の海上、豊漁丸からのスケッチである。島前は水没して切れ切れとなる。CD中ノ島は、前節同様西ノ島の高所が見えている可能性がある。E島後の右端の頂点は大満寺山であろう。三子・双子の景観は得られない。野帳では「双子の印象なし。」とする。

* * *

以上、限られた事例であるが、島根半島の北側沿岸の、隠岐汽船航路を外れた海上での低い視点による観察でも、島前もしくは島後も含めて、拙稿B論文の航路上程印象的な三子の景観を見ることはできなかった。即ち、第2節図(7)の島前が、「三子に見ようとすれば見える程度、であろう。」(野帳)だけである。双子についても、拙稿B論文の航路上(前編(一)2ペ図(7)→D)に於て島前と島後が対等の量感で並んだ景観に匹敵する事例はなく、第1節図(5)の島前と島後で「双子の印象あり。」(野帳)とする1例のみである。

結局、本章に記述した僻地海上に於ける稀な双子の景観が、『記・紀』神話の「雙生」の原因となった可能性は、ほとんどないであろう。

四 地蔵崎島前間航路上での「三子」の景観追跡 (一)

—— B論文の修正と再確認 ——

(1) B論文の再検討に当たって、「航路のずれ」の問題

前編(一)「はじめに」に於て、「B論文では三子あるいは双子に見えた正確な地点を地図上に記していなかったから、追試に耐え得る緯度経度を明記したもっと多数の、スケッチと地図を示す必要があると考えるようになった。」(前編(一)4ペ下段2行目〜4行目)と述べた。そこ

で、昭和60(85)年夏から平成12(00)年夏の間に、地蔵崎島前航路上で島前(見えた場合は島後も)の観察を5回行った。このうち最も良く見えたのが、昭和60年8月18日12時50分に境港を出航し島前に向かう隠岐汽船「マリンスター」(柗和雄船長)操舵室からの景観、即ち、図(36)〜(46)だった(図(46)・(45)はこの時の景観ではない。船の進路を焼火山に照準した時に最も三子の景観となることを本章で論ずるために、便宜上図(46)の次に掲載したものである)。

しかし、この「マリンスター」での追跡で海図に記入した写真撮影(その後にスケッチする)地点が、当時の私の知識不足(以下で述べる)のため、不完全であることが後に判った。「マリンスター」(海面からの操舵室の高さは約4m)は既に廃船となっているため、別の船でも一度やり直すべきところである。しかし、述べた通り、滞在しても何時機会に恵まれるか判らない調査である。やむを得ず、「フェリーおきじ」(海面からの操舵室の高さは約12.6m)の門脇隆久一等航海士にお願いし、隠岐が良く見えた機会に図(36)〜(46)と同じ景観が得られる地点を求めて操船して頂き、その都度緯度経度を船舶用GPSにより記録して頂いた。それが、各図面の左下に記入した緯度経度である。「フェリーおきじ」の操舵室は「マリンスター」よりも約7.6m高い。従って、図(36)〜(46)の景観の緯度経度は、私が「マリンスター」でスケッチした時の地点よりも、南方でのものとなる。

ここで右の「私の知識不足」について述べる。即ち、「マリンスター」での昭和60(85)年8月18日の調査当時、私は地蔵崎島前間の航路は単純に一直線と思い込んでいた(前編(一)2ペ図(7)の地蔵崎島前間、島後七類間の航路を一直線で示したのも不正確である。また、同じ図(7)の地蔵崎島前間の航路の角度も、以下に述べる隠岐汽船の社則によれば、不正確な描き方である)ため、予め海図に直線で記入して頂いた予定航路上に、峠坂堅夫一等航海士にその都度測って頂いた船舶用レーダーでの船の位置(地蔵崎へから〇マイル地点)を記入すれば良いものと考えていた。しかし、平成12(00)年8月8日「フェリーおきじ」での航海時に門

脇隆久一等航海士より、次のようなご教示を受けた。

地蔵崎から島前湾内に向かう航路での隠岐汽船の船は、社則により地蔵崎燈台を(西)27度(磁気コンパス。「マリンスター」は磁気コンパスであった。現在のジャイロコンパスでの265度に相当する)に見て、0.73マイル離れた地点で、進路を知夫里島の竹島方向34度(磁気コンパス。現在のジャイロコンパスでの335度に相当する)に決める(「コンパスを立てる」と称する)。しかし、船はこの社則による航路上を必ずしも進んでいる訳ではなく、その時々々の風向き・風速・潮流によって右(東)に左(西)に流されており、その都度修正しながら進んでいる。現在の船は自動運転となっているが、修正せずに放置しておけば起点で定めた社則の角度を維持したまま流されてしまう。

同様に、七類から西郷へ向かう航路(前編(一)2ページ(D)も同様)に社則で定まっている。平成12年8月15日に乗船した「フェリーくが」の峰坂堅夫一等航海士のご教示によると、

七類湾の出口の北にある九島燈台を西27度(平行)に見て0.2マイル離れた地点を起点として8度(共にジャイロコンパス)の航路で進む。しかし、終止8度のコースを守っている訳ではなく、予め海図に引いた線よりも若干ずれる(この時私は後述(本紀要次号)の双子の景観の追跡を行っていた。その際写真撮影した地点を海図に記入して頂いたところ、予め引いた航路よりも確かに多少のずれがあった)。

この現象を確認するために、平成12年8月16日、島前から地蔵崎を回り境港に向かう「フェリーおきじ」の村上明船長のご高配により、知夫里島東南の竹島を245度に見て0.2マイル地点に於て、所定(社則)の155度(共にジャイロコンパス)でコンパスを立てた後は、船が地蔵崎を回れなくなる直前の地点(この時の地図ではないが、地図③のキ地点附近)まで船を自動操縦に任せ、服部信幸航海士に私の写真撮影(隠岐島の景観観察。撮影後スケッチをした)の地点を海図に記入して頂いた

結果、10地点のうちで予定の航路上にあった地点は、1カ所もなかった。即ち、島根半島北岸まで約9.8kmの第8地点で西に約100m、約6kmの第10地点で西に約200m流され、その他の8地点では全部東に流されていた。特に隠岐海峡の中央附近の第4地点では東に約2kmも流されていた(その他の7地点では50mから数100m流されていた)。

右により、夏期の比較的波穏やかな天候でも航路がずれることが判った。特に、冬期に於ては意識的に波をかわして進むため、所定の航路からずれるという。即ち門脇隆久氏のご教示によれば、船が大波を真正面から受けると衝激が加わるため、所定の航路に対し忠実に進まず、その時々々の状況に従って大波をかわしつつ進む、という。同じく、峰坂堅夫氏のご教示によれば、次の如くである。

島根半島に沿って潮の流れがあるため、地蔵崎では北2〜3マイル附近、七類湾の入口では九島の北2マイル附近で波が高くなる。特に地蔵崎の先端附近では潮流の方向が変わり、且つ海底が浅いため、波が高くなる。地蔵崎の東北に並ぶ沖ノ御前島と地ノ御前島の間を船が通過する際に北西風が強いと、大きな横波を受ける。30トン前後の小さな「マリンスター」では、横揺れ防止装置の鰭を船腹に付けていても十分に消去できなかった。そのため、通常は両島の間を通過するところを、大時化の時には沖ノ御前島の東方を迂回して地蔵崎を出入した。防止装置の利きが良い(4〜5mの横波に耐えられる)大型の「フェリーくが」でも、大波の時には現在も進路を斜めに取って島前に向かってる。今から20年程前に「フェリーおきじ」に横揺れ防止装置を付けたのが最初で、それ以前の船は横波をかわしながら、進路をジグザグに取った。(平成12(2000)年8月15日ご教示)

B論文の昭和49(74)年の2回の航海は4月と11月であった。どちらもかなりの時化で、船が地蔵崎を回り外海に出るや、非常に揺れとなり、船酔いに強い私も4月の航海では完全に嘔吐した。従って、前編(一)3ページ(イ)(即ち、B論文図(四))の三子のスケッチを行なった地点

が、同2ペ図(ア) (即ち、B論文図(一))の直線の航路上にあったとは断言できない。そこで、此度のB論文の再検討に当たって、写真撮影(その後スケッチする)を開始した時点での位置をその都度乗組員の方に海図に記入して頂いた。結果は、地図(2)・(5)の如く、所定の航路からはずれてジグザグとなっていた。

(2) 隠岐汽船「マリンスター」による「三子」の景観追跡

以上により、図36(46) (次号掲載予定)の景観を説明する。地図(2) A地点・図36では島後も見えたが三子・双子の印象はない(以下島前のみを追跡)。C地点・図38附近から三子に見え始めた。E地点・図40附近でAB知夫里島・C西ノ島・D中ノ島が各々裾を接して浮かび、三子の印象を受けた。拙稿B論文の図(三) (即ち、前編(一)3ペ図(イ)上段)のスケッチは、この附近であろう。その後は、知夫里島の右端と中ノ島の左端が西ノ島に重なり始めた。F地点附近で図(四)の如く両島が西ノ島の前に若干せり出し、3島は対等の量感となり、此処で「最も三子の形態となる。」(野帳)。さらに進むに従って、知夫里島と中ノ島は西ノ島の前に一層せり出して来るけれども、三子の印象は続く。H地点・図(四)に至り「正しく三子だ。」(野帳)とある如く、第1章より続けて来た追跡の中で、最も強い三子の印象を受けた。拙稿B論文の図(四) (即ち、本稿前編(一)3ペ図(イ)下段)の粗描は、この附近だったのだろう。I地点・図(四)となっても、3島の量感はほぼ等しい(知夫里島と中ノ島が焼火山を中心とする西ノ島を挟み込む形となるけれども、焼火山の標高が高いために量感は2島に劣らない)ため、「三子の印象崩れず。」(野帳)とある。

J地点・図(四)島前に相当接近すると、知夫里島と中ノ島の量感は一層増すが、「まだ三子の印象を受ける。」(野帳)。3島のうち知夫里島は地図の平面上では最も小さい島である。しかし、3島のうちでは南端の本土に最も近い島であることと、島前に接近するにつれて船のコー

スは南西寄りとなり知夫里島が最も近い島となることから、量感是他の2島に劣らない。一方、西ノ島は3島の中で最も大きく、地図の平面上では中ノ島の約2.5倍、知夫里島の約4倍もあるのだが、図(四)の如く2島の蔭となるため、海上から受ける量感是他の2島を圧倒しない。このJ地点・図(四)に至って、「(B)論文の訂正必要なし。」と野帳にある。K地点・図(四)になると、それまでA知夫里島と一体化していたB大波加島が独立した姿となる。そして、C焼火山を中心とする西ノ島の量感が、AとD中ノ島よりも小さくなる。此処でようやく三子の印象は弱くなる。しかし、まだ「辛うじて三子の印象が残る。」(野帳)。本節の景観追跡で受けた三子の印象は、第1章以来続けて来た追跡の中では、最も「三子」としての印象が強いものである。

(3) 航海目標としての焼火山と三子の景観

平成12(00)年8月8日14時40分境港出航の「フェリーおきじ」(藤田武治船長・門脇隆久一等航海士)による追跡の際、船が知夫里島に接近して航路が僅かに南西にずれることで、島前3島の景観が図(四)とは大きく変化することを知った。本節では、焼火山に船の進路を照準させた時、島前が最も三子の景観となることについて述べる。地図は前節に用いた、地図(2)を使用する。

右の航海時は晴天であったが、地蔵崎を船が回ると隠岐方面は水蒸気のため全く見通しが利かなかった。そのため、船舶レーダーの画像で追跡することにした。即ち、 $35^{\circ}26'12.00''N \cdot 133^{\circ}19'06.00''E$ 地点附近(地図(2)C地点・図38のやや南方)に於て、地図の平面上では面積・高度でかなり差がある3島が14ペ写真(上段)の如く、ほぼ同等の大きさで鼎立した。門脇氏によれば、電波が島の高所を捉えるためであるという。以後島前に近接するまでの間7地点でレーダー画像の写真を撮影しつつ印象を記録した。その結果、レーダー上で3島がほぼ同等に近い大きさで鼎立する姿は、14ペ写真(下段)、 $35^{\circ}58'48.00''N \cdot$



隠岐汽船「フェリーおきじ」の船舶用レーダーに映る島前3島（線上が西ノ島、左知夫里島、右中ノ島）。右上端は島後、下端は島根半島東部。35°26′12.00″N・133°19′06.00″E地点附近。平成12（'00）年8月8日撮影（50ミリレンズ）

133°06′36.00″E（地図②K・図④6のやや北）地点まで続いた。

16時20分頃、35°51′00.00″N・133°11′06.00″E（地図②I〜J・図④5の中間附近）で島前がスケッチできる程度に見え始めた（島後はまだ見えない。天候条件が悪いと島前の内海入口に達しても見えない（B論文12ペ14行目〜17行目参照）。ところが、地図②K・図④6附近のやや北方にまで進むと、これまでの追跡では見たことのない、図④6の姿となった。即ち、3島の量感の均衡は崩れ、A知夫里島が突出してC中ノ島の2倍程の大きさとなり、両島に挟まれてB焼火山を中心とする西ノ島が最も小さくなっていた。門脇氏にお尋ねすると、「今船が潮の流れで航路が西寄りになっているため。」とのことであった。そこで、図④6ス



同 島前3島（線上が西ノ島、左知夫里島、右中ノ島）。右上端は島後、下端は島根半島東部。35°38′30.00″N・133°17′54.00″E地点附近。撮影データは上に同じ。

ケッチ後の16時30分に舵をほんの僅か東に切って、35°52′12.00″N・133°11′12.00″E（地図②Jのやや北附近）に移動して頂くと、図④6の如く、島前はD焼火山・A（BC）知夫里島・E中ノ島の3島がほぼ等しい量感となり、再び三子の姿に戻った。

昭和50（'75）年のB論文に於て私が、

特に、航海中は三島の丁度中心に聳える円錐形の焼火山（西島）の頂点に船の舳先のポールを照準させ続けて進んで行くのである。（12ペ12行目〜13行目。前編（一）下段8行目〜10行目）

と述べた通り、この時も船の舳先のポールを焼火山の頂点に照準させていた。B論文以後に船の運転は自動化されたけれども、前節で述べ



隠岐汽船「フェリーおきじ」操舵室内神棚
平成12(00)年8月8日撮影(50ミリレンズ)

た航路修正の必要から、今も地蔵崎でコンパスを立てると焼火山の頂点にポールを照準させて進んでゆく(平成12(00)年8月13日「レインボーII」武田 優船長ご教示)。図30(40)の追跡に於ける焼火山の印象的な姿をご理解頂けると思う。門脇隆久氏は、「三子に見える見えないに係わらず船は焼火山を目標として向かっており、その途中で結果的に三子に見えるということなのだろう。天候が良ければ地蔵崎を回った時から三子に見える。」と言われる(平成12(00)年8月8日・13日ご教示)。航海目標として重要な焼火山は、江戸時代北前船を初めとして全国的に崇敬された⁽⁴⁾。そして、今日でも隠岐汽船は焼火山の南方山麓にある焼火神社の鳥居正面沖合を通過する時、常に汽笛を1回鳴らして敬



同。中央に美保神社、左下隅に焼火神社の守り札を祀る。美保神社の方をより崇敬している(門脇隆久一等航海士)という。撮影データは上に同じ。

意を表している(美保関の美保神社の前(沖)を通過する時にも同様にしている。船の操舵室の神棚には写真の如く焼火神社と美保神社が祀られている)。

(4) 本章の結論

以上により、地蔵崎島前間の航海では、知夫里島に近接するまで焼火山を目標にしていると、これまでの諸所からの観察の中では最も印象的な三子の景観が得られることが判った。従って、前編(一)「はじめに」(1ペ上段18行目(下段8行目)に引用したB論文の左記の記述に誤

りのないことが明らかとなった。即ち、

図(三) (即ち、前編(一)3ペ図(イ)上段)のスケッチ (眼で見た印象を伝える) の如く、遠いほど三島は互いに重なりながらも各々同じ大きさに見える。しかも、中ノ島と知夫島とが手前に離れて左右に並び、その中央の向う側に西ノ島がこれまた同じ大きさにはっきり独立して見える。それは正しく「三子」であった。次に(四) (即ち、前編(一)3ペ図(イ)下段) のスケッチの如くさらに接近すると、三島はかなり重なり合うけれども、手前の二島が濃く、中央の一島が薄く見えるので、右述の三子の感じは失なわれない。この光景は、島前に着くまでの間ほとんど変化がないので、右のコースで見ると三島の姿は強烈である。(B論文12ペ8行目～12行目)

右の体験からすれば、地蔵崎を起点とする航路のみならず、鳥取県淀江町・大山町・名和町方面から地蔵崎の沖合を通過して焼火山を目標として進む航路上でも、島前の三子の景観は得られるものと推測できる。

注

- (1) 昭和60(85)年8月18日(「マリンスター」)、平成12(00)年8月8日・9日(「フェリーおきじ」)、平成12年8月13日・16日(「フェリーおきじ」)。
- (2) ジャイロコンパスは真北を指す。磁気コンパスは地磁気の影響により約6度西偏する。従って、磁気コンパスの時代は進路を修正しながら航海した。「現在のジャイロコンパスに切替った明確な時期についての記憶はないが、『先代のフェリーくにか』(昭和62(87)年4月1日)『平成11年3月末就航』の時代からである。」と門脇隆久氏は言われる(平成14(02)年3月27日)教示。
- (3) この角度のことをB論文執筆時に知らなかったから、前編(一)2ペ図(ア)の地蔵崎島前間・島後七類間航路の線は不正確である。
- (4) 隠岐島前・島後教育委員会(1986) 口絵および口絵説明。
- (5) 鳥取県の海岸は少ないと言われるけれども、後世の史料であるが、鳥根県立図書館所蔵「出雲国絵図」(元禄時代)には美保関より現島

取県方面への海路を描き、「此湊ヨリ伯耆國境村(日野川川口附近?…服部)へ海上三里・赤崎へ十一里・とまりへ十八里」、此湊ヨリ但馬國もろよせの湊迄海上三十里」と注記する(解説は鳥根県立図書館飯田奈美子氏による)。また、どの程度信憑性があるものか未調査だが、名和町(1978・300)に「名和氏が隠岐と一衣帯水の奈和港において海運業を営み『庶軒目録』に『いわし売り』と書かれるものならば(後略、服部)とある。平野芳英(1986・71)は、鳥取県倉吉市出土の黒曜石1点(旧石器時代)・同県岩美郡福部村出土の黒曜石原石1点(縄文時代前期)が、島後五箇村大字久美産であるとす。神話の話であるが、『古事記』の稻羽之素菟は淤岐嶋から渡って来た。

五 地蔵崎島前間航路上での「三子」の景観追跡 (二)

—— 前章追跡の再検討と再確認 ——

前章第2節の三子の追跡は、昭和60(85)年8月18日「マリンスター」による所定の航路(前章第1節に述べた如く、後の「フェリーおきじ」での位置確認により実際には若干ずれていたことが明らかになった)上のものであった。紙幅の都合で本論文に報告できない他の2回の追跡も同じ航路上である。そこで、所定の航路に限定されない場合にどのような景観が得られるか二つの試みをした。

一つは、平成12(00)年8月9日島前から地蔵崎に向かう「フェリーおきじ」の藤田武治船長のご高配により、所定の航路から離れ、島前が確実に三子に見える地点を選びながら操船して頂いた。私は大艦(最後部の大甲板。海面からの高度約7.5m)に立ち、門脇隆久一等航海士が景観を確認しつつ操船の指示を出し、私がトランシーバーで写真撮影(その後スケッチを行なう)地点を合図する度に乗組員の方がGPSでの位置を記録し、門脇氏が海図にそれを記入して下さった。この時のスケッチが地図(3)ア～キ・図(47)～(53)である。従って、前章の地図(2)A～K・図(36)～(46)の緯度経度よりも確実である。

もっとも、船舶用GPSの数値には数mの誤差があるという(門脇隆久氏)し、その数値は500秒の単位まで画面に表示され、それが船の進行に従い絶え間なく変化している。従って、本論文の各図面に記入した緯度経度は厳密には総て「附近」とすべきである。また、私が写真撮影とその記録をメモし、スケッチを終了するまでの時間は、長い時(画面の大きい近景)で10分程度を要する。この間も景観は変わり続けているから、図(47)～(53)の景観と図面に記入した緯度経度(地図(3)ア～キの位置)とは厳密には一致しないから、その点でも「附近」とすべきである。スケッチの中でも最も近い距離での図面は、見る見る変化する間に行なったものである。他の航海中のスケッチも同様である。但し、第3章の図(5)(7)(10)(12)、および第6章の図(54)～(70)は漁船を停止させて行なったものである。

島前の南の海峡「大口」から地蔵崎に向かう隠岐汽船の進路は、前述の社則により、竹島(図(46)G・(47)C)を西245度に見て0.2マイルの地点で155度(ジャイロコンパス)と定まっている。本章の「フェリーおきじ」による追跡では、焼火山を中心として確実に三子に見えるコースをとることから、同地点で149度の進路に変更した。地図(3)キ地点以上に進むと船が地蔵崎を回れなくなるため、キ地点で観察を終了した。この追跡の図(47)～(53)は、前章の図(30)～(46)と極端な差はなく、キ地点図(53)附近まで「三子に感ずるように思う。」と野帳に記している。

この追跡では、最終のキ地点と焼火山の山頂を結んだ線の延長線が本土に到達する地点の地図(1)29地点(35°29'33.60"N・133°27'12.00"E附近)から、島前がどのような姿に見えるかも関心があつた。これについては、第2章3ペ上段20行目に述べた如く、地図(1)29に最も近い地図(1)27・図(29)では、中ノ島が水没してC西ノ島の高所が僅かに覗いているようだった。キ地点での観察後、2分程で中ノ島は水没したが、その後西ノ島の高所が見えるか否かは、水蒸気のため見通しが利かず、確認できなかった。

もう一つの試みは、前章12ペ上段23行目～下段5行目に述べた、船

を自動運行に任せた場合、所定の航路からどの程度流されるかを平成12(00)年8月16日「フェリーおきじ」で実験した時の景観追跡である(紙幅の都合により、地図は掲載しない)。これ以上自動運転に任せる^⑩と地蔵崎を回り境水道に入れなくなる第10地点(本土まで南に一直線で42km)で観察を打ち切った。これらのスケッチ(紙幅の都合により、図面は掲載しない)でも、図(36)～(46)・図(47)～(53)の姿と大差はなかった。

以上により、島前が確実に三子の姿となるのは、地図(3)ア～カ(キ)地点であることが判った。しかし、この地点に限定されるのではなく、地図(2)C～J(K)地点附近でも可能であることが判った。さらに、本章と前章に取り上げた自動運行に任せて航海した10地点のうち、島前^⑪から本土に向かって8番目の地点までも、同様な三子の景観となる^⑪ことが明らかとなった。

注

(1) 島前から本土に向かって次の10地点:

- ① 35°57'54.00"N・133°06'36.00"E
- ② 35°55'06.00"N・133°08'12.00"E
- ③ 35°51'24.00"N・133°10'18.00"E
- ④ 35°46'54.00"N・133°12'54.00"E
- ⑤ 35°44'48.00"N・133°14'06.00"E
- ⑥ 35°42'54.00"N・133°15'06.00"E
- ⑦ 35°41'12.00"N・133°16'06.00"E
- ⑧ 35°39'36.00"N・133°16'54.00"E
- ⑨ 35°36'36.00"N・133°17'30.00"E
- ⑩ 35°37'42.00"N・133°17'54.00"E

右の③～⑤地点で、前編(1)3ペ図(1)下段(B論文図四)に近い景観となる。⑥⑦地点では図(1)上段(B論文図三)に近い景観となる(野帳)。⑧⑩地点では見通しが悪くなったため、三子の印象についての記録は、野帳にない。

六 島根町野井漁港島前海上での「三子」(・「双子」)の景観追跡——『風土記』の官船航路を考慮しつつ——

地図(4)・図54〜(70)に「島前三子の景観追跡③」と記した観察について述べる。第4・5章の観察は、海上から操舵室床面までの高さ約4m(「マリンスター」)・約11.6m(「フェリーおきじ」)・約7.5m(「フェリーおきじ」後部大甲板)と高い位置からの観察で、しかも地蔵崎島前間の航路上もしくはその附近に限定されたものであった。そこで、小型船で、地蔵崎島前間以外の海上から観察する必要があると考える。その一端として第3章で島根半島沿岸海上からの景観を報告した。本章では、隠岐海峡の沖合に乗り出した漁船上からの観察を行なう。その際、『風土記』の本土知夫里島間の官船航路での景観も念頭に置いて調査する。

(1) 『風土記』の官船航路

『風土記』嶋根郡に「千酌濱(中略、服部)此則所謂度隠岐國津是矣。」(秋本吉郎〈1964:146〉)・「通隠岐渡千酌驛家濱」(同152頁)、巻末記に「至隠岐渡千酌驛家濱」(同248頁)とある如く、渡船が備えてあった。千酌驛家濱は地図(1)12(前編(一)2頁図(7))にあり、「津」の防波堤の痕跡は敗戦後も残っていた(拙稿H論文20頁〜30頁)。風土記時代の千酌から連絡する隠岐側の「津」は、知夫里島の現郡港(知夫港。前編(一)図(7))であったろう。本土に最も近く、奥まった天然の良港である。此処に「郡」の地名が残るのは、智夫郡(天平4年隠岐国正税帳)・知夫郡(20巻本『和名抄』)の郡家が置かれたことを示すものである。律令時代、島前の3島で2郡を設置し、しかも3島の中で最も小さな知夫里島に1郡を置いたのは、この島が本土間の交通に於ける玄関口であったからであろう。『隠岐島誌』は、知夫里島の地

名起原を「道触神」を祀ったことにあるとする(隠岐支庁〈1972:19。拙稿B論文9頁〜10頁1行目〉10頁1行目)。島根県教育委員会(1998:74)は、『隠岐御役人御更代覚』等の資料で慶長四年(一五九九)から天保六年(一八三五)までの二三〇年間をみると、美保関、大浦、宇龍、松江の四港が挙げられているが、中でも美保関が最も多く利用されている。宇龍は大森代官支配時代の出港地である。隠岐の上陸地は島前ではほとんどの場合「郡湊」(現在の知夫港)であり、全体の九〇%を占め(後略、服部)たとする。(谷田義治氏担当分)

(2) 漁船による「三子」(・「双子」)の景観追跡

私は島前の見えた昭和60(85)年8月10日午前、第3章の弘進丸(9ペ下段24行目。海面からの甲板の高さ、約0.4m)で島根町大字野井(地図(1)10)の漁港を出航し、地図(4)q↓pの航路で往復した。この間aからqの地点で写真撮影とスケッチを行なった。これが、図54〜(70)(次号に掲載)である。述べた如く、当時は携帯用GPSは発売されていなかったから、地図(4)aからqの位置は、以下のような方法で割り出した凡そのものである。即ち、島前から地蔵崎に向かう「フェリーく」が丸」と交叉したe地点の時刻を、野井に帰港後「く」が丸」の川内正幸船長に船舶電話で問い合わせ、e地点が30.41N・133.10Eであることをご教示頂き、これを基準にその他の地点を弘進丸の羅針盤(磁気コンパス)と走行時間(定速走行。スケッチ地点では船を停止した)から割り出した。従って、厳密には総て「く」地点附近」である。地図(4)eは、隠岐汽船航路上の地図(2)Eと非常に近い地点である。地図(4)e・図58と地図(2)E・図(40)とを比較すると、高さ約0.4mの弘進丸甲板からと高さ約2.0mの「フェリーおきじ」操舵室からとの景観の相違が判る。即ち、図(40)ではA知夫里島・B知夫里島の東南端?・C西ノ島・D中ノ島が繋がるのに対し、図(58)ではA・B・Cが切れ、

D 西ノ島の一部とE 中ノ島(西ノ島も重なっているか)が水平線で僅かに繋がる。図(40)の野帳には『大妻国文』9号論文図(三)(即ち、前編(一)3ページ上段)に近い。」とあるのに対し、図(58)には三子の印象を記録しない。地図(4)eから焼火山を目標として8マイル進んだ、f地点図(59)に到り、この追跡では初めて「島前三子の印象あり。」と記録する(同時に「島前島後の量感対等となり、双子に見える。」と記録する)。この時、A知夫里島とC中ノ島がB西ノ島のやや前方に出る。しかし、野帳には『大妻国文』論文図(四)(即ち、前編(一)3ページ下段)の如き三子にならない。」とある。この時の弘進丸の地点と視点の低さのためであろうか。これに対して、地図(2)fからはほぼ平行に東へ寄った、「フェリーおきじ」からの地図(2)FF図(41)(35°42'36.00"N・133°15'06.00"E)では、A知夫里島・B西ノ島・C中ノ島の量感が対等となり、「この地点で最も三子の形態となる。」(野帳)とある。

次に、地図(4)fより出発地のqまで一直線に帰港する間の景観変化を観察した。地図(4)g・図(60)では、図(59)よりも「さらに三子に見える。」(野帳)とある。地図(4)h・i・j(図(61)・(62)・(63))でも「三子に見える。」(野帳)とある。そして、地図(4)k・図(64)では、「三子」と記さずに「まだ三つに離れて見える。」(野帳)とある。さらに、地図(4)l・図(65)になると、C中ノ島は、A知夫里島・B西ノ島よりも「島影が薄くなる。」(野帳)。中ノ島はより遠方にあり、且つ高度が低いいため、弘進丸が南西に進むに連れて水没してゆく。そして、地図(4)m・図(66)に到って「三子の印象なし。」(野帳)と記す。野井漁港に近づいた地図(4)n・図(67)では、中ノ島の島影はますます遠く小さくなった。

以上の追跡の結果、「島前を三子に見るためには、中ノ島が知夫里島・西ノ島と相並ぶ位の量感となるまで接近し、かつ知夫里島と西ノ島とが離れて見えるように東へ寄ることが必要である。」(野帳)ことが判った。かように、第4・5章に述べた隠岐汽船の地蔵崎島前間航路から外れた諸地点に於ても、漁船上より「三子」の景観が得られる。従って、地蔵崎方面や島根半島の雲津浦(地図(1)21)から、地図(4)

(d・e・) f・g・h・i・jを通過して郡湊に向かう際に、第4・5章の三子に近い姿を見ることができると思う。実際、地図(2)(3)(4)にない観察地点の地図(5)ア・図(7)は、地蔵崎方面および雲津から郡湊に向かう線上にあるが、此処からも「島前が三子に見える。」(野帳)。図(7)は、海面からの高度約220mの「フェリーくが」操舵室でのスケッチであるから、小船の場合は、ア地点よりも郡湊方面にさらに接近した時に同じ景観が得られるであろう。実際、アの北西方向の延長線上となり得る地図(4)h・i・j(図(61)・(62)・(63))では、孰れも島前が「三子に見える。」(野帳)。

(3) 『風土記』の官船航路上での景観、および古代の船と帆装

次に、『風土記』の千酌驛家濱から知夫里島に向かう航路上での景観はいかがであろうか。これについては、千酌漁港から郡港を結ぶ線上に近い地図(4)a・n・oでの景観が参考になる。即ち、a地点・図(54)では「三子の景観なし。」(野帳)とある。これは、A知夫里島が小さく、C中ノ島の大半が水没するためである。n地点・図(67)には三子の印象を記していない。これは、A知夫里島とB西ノ島が一続きとなり、C中ノ島(西ノ島の高所が重なるか)が遠く、水没して切れ切れとなっているためである。千酌・郡港を結ぶ線上に最も近いo地点・図(68)では、船が西(知夫里島)寄りとなったため、A知夫里島の量感がC西ノ島に迫まって来る。これは、第4章14ページ上段5行目〜9行目に述べた、「フェリーおきじ」が知夫里島に接近して航路が西寄りになった時に、図(68)の如く、A知夫里島の量感が、B西ノ島・C中ノ島を圧倒したことを想起させる。従って、地図(4)oの線上で千酌驛家濱から知夫里島に接近すれば、類似した景観になるものと推測できる。結局、地図(4)o(a・n)の線上に限定して推測すれば、本章第2節に見たような三子の景観が得られる可能性は小さいと思う。但し、航路がo(a・n)から外れ、より東寄りになり、地図(4)h・i・jと

郡港を結ぶ線上になれば、三子の景観は得られるであろう。

安達裕之（1998・18～19）は、

古墳時代の出土船にも船形埴輪にも帆柱を立てた跡がありません。しかし、珍敷塚古墳などの裝飾古墳に描かれた船を見ると、どうやら両舷に棒を立て、その間に帆を張っていたようです。こうした固定式の帆はミクロネシアの船や江戸時代のアイヌ民族の船でも使われていますが、帆としては追風を利用するだけの簡単なものですから、航海では帆よりも櫂が主役であった筈です。

とする。近年出土した国内最大の精密な船形埴輪（三重県松阪市宝塚1号墳）は「準構造船を模したもので」、「船の中央部底には、粘土塊により補強された穿孔が3か所ある」。そのうち「前方部には大きい方の威杖（出土品：服部注）、後方部には小さい方の威杖（同：服部注）を立て」、「中央の穴に該当する立ち飾りはないが、付近の状況から腐食してなくなる有機物と考えられる。立ち飾りで知られる東殿塚古墳（天理市：服部注）出土の円筒埴輪の線刻画からみて、現在のところは旗と推定している。」（松阪市教育委員会〈2001：33～34〉。傍点は服部）とする。

私の知る限りでは、帆柱と舵を具備した古代の外洋船の出土例は見えないけれども、船形埴輪は古墳時代のものであるから、『風土記』隠岐渡の官船も同じであったとは断言できない。『合義解』『厩牧令』の「水駅」に隠岐渡が該当すれば、「驛別置_二船四隻以下。二隻以上_一。随_レ船配_二丁_一。」（注に「_一前略、服部_二船有_二大小_一。故随_レ船配_二人_一。令_レ應_レ堪_レ行。〈後略、服部〉とあるから、長距離を手擡ぎで推進し得る水子を用意できたろう。一方、『合義解』『雑令』の「要路津濟」に隠岐渡が該当したとすれば、「度子」が「二人已上。十人以下。」待機し、「毎二人。船各一艘。」が用意されたことになる。この点について、私はH論文で次のような疑問と意見を述べた。即ち、

渡船の漕ぎ手が船1隻につき2人というのは実際だったのだろうか。平常は官吏の往来に主に利用したのであるから、それほど

大きな船は必要としなかったであろう。朝集使には随員の雑掌2名が伴するだけである。その程度の人数なら（中略、服部）サンパ船（長さのほm程度。1人漕ぎ）でも足りる。しかし、島前の「隠州崎村ノ濟海路十八里」（桑原文庫本『出雲風土記抄』第2冊8才）を2人で漕ぎ渡るのは、特に風波の強い時には酷であろう。『合義解』『厩牧令』水駅条の「随_レ船配_二丁_一」の古記説「随_レ船配_二丁_一。謂_レ无_二多少限_一。臨_レ船量_二耳_一。」の如き適用があったのなら、数丁櫂で渡ったかもしれない。もっとも、島根町大字加賀の金津忠市氏（明治32年生）が敗戦後（戦前は時たま）一人乗りの小船で一本釣りをしていた際、海岸から潜戸の崎までは櫂で進み、崎からは帆を上げて多古鼻（中略、服部）方面に向かったというから、隠岐の渡船も帆を用いた可能性が十分ある。『万葉集』二〇番歌にも「海人小舟帆_一かも張れる」とある。（日論文35頁注（一））

私はH論文に於て、「千酌に隠岐渡が設置された理由の第一は、隠岐国との航海のための風向きにあった」と考えた。即ち、「朝集使は旧暦11月1日までに上京し、任終えれば直ちに、帰国しなければならなかった。出挙帳も『明年正月一日』が限度である（『民部式』）。従って、冬期も隠岐と本土とは連絡が保たれていた。この地方では「11月中旬から3月中旬の間は季節風の荒天が繰り返えされる。」（北西風および西風の時には、（中略、服部）多古鼻から東方の湾はその風蔭になるから着岸は可能である。また、隠岐島から本土に向かう場合、北西風と西風の時には千酌方面ならば風を斜めに受けて進むことができ。しかし、多古鼻から西、特に恵曇附近から西は風上に向かうことになって進むことができない。そして、「千酌の湾は冬の西北の強風の時に風になる」）「船出にも着岸にも好都合な港であ」った。故に、「隠岐渡が千酌に設置された理由は、主に冬期の発着が可能であったことにある」（日論文36頁上段20行目～37頁下段10行目。傍点は原文）と考

える。後述の第8章第2節に於ては、『日本後紀』の記事から、「夜の

陸風を利用した帆装船の存在」を推測した(本号23ページ18行目〜19行目)。

以上により、千酌から知夫里島に渡る風土記時代の官船は、帆も使用したと思う。時代は下るが、『土佐日記』では、帆と櫂と綱手(曳船)とをそれぞれ天候と水路の事情により使い分けている。江戸時代「隠岐御役人」の使用した

公用船は百八十石積程度の帆船で、島前に配備された「観音丸」及び島後に配備された「日吉丸」の二艘で役人の往来、官米の輸送の任に当たっていた。そのほか民間船もしばしば公用船として使用された。(島根県教育委員会〈1998:94〉)

千酌から郡港に向かった場合でも、風向きや風速によって地図(4) a・n・oの線上から東に外れ、h・i・j附近を通過した際には、右の如く三子の景観が得られる可能性がある。しかし、h・i・jが官船の常時の航路として決まっていたとまでは断言できないから、「隠岐之三子嶋」の地名が、この官船航路での体験から生まれたと断定することはできない。

それに、私の地図(4)の漁船による追跡は隠岐海峡の中心にまで及んでいないから、h・i・jの線上で知夫里島にさらに接近し、郡港に到達するまでの間三子の景観が持続する、と断定する自信はない。むしろ、図(4)の、知夫里島に接近して航路が西寄りになった時に知夫里島の量感が他を圧した景観を参考にすれば、この線上で知夫里島に接近するに連れて三子の景観は得られなくなる可能性が大いと思う。

従って、『記』の「隠岐之三子嶋」・『紀』の「億岐三子洲」が、隠岐渡で千酌濱知夫里島間を往来した官人の隠岐海峡での体験のみから生まれた地名であるとするのは、困難と思う。

注

(1) 『常陸国風土記』によると、天智朝に作った「覓國」用の「大船」は、「長一十五丈、濶一丈餘」(秋本吉郎〈1962:72〉)あったとあるから、古

代の船が総て小型であったとは断定しないが、右の「大船」は長期に亘るであろう北方奥地の探険用である。「隠岐渡」の「渡船」はそれ程大形ではあるまい。

七 「三子」の景観追跡(第1章〜第6章) 小結

前編(一)第1章の考察により、島根半島陸上から島前もしくは島前島後とて三子の景観が得られないことが明らかとなった。本号の第2章の考察では、鳥取県西部沿岸と若干内陸に入った地点からも、同様に三子の景観は得られなかった。第3章の考察によれば、隠岐汽船の航路からはずれた島根半島北側沿岸海上の漁船上からも確実な三子の景観は得られず、地図(1)7・図(7)の「三子に見ようとすれば見える程度であろう。」だけであった。

結局、第4章から第6章の追跡の結果、意識的に操船して観察した地図(3)A↓Kの航路上で島前が最も三子に見える(第5章)こととなる。特に、地蔵崎から焼火山を目標に航海した地図(2)C↓K地点でも確実に島前を三子に見ることができた(第4章)。さらには、島前から地蔵崎に向かって所定の進路に固定し、風や潮流に任せて流されつつ観察した10地点中の1番目から8番目の地点に於ても島前を三子として見ることができた。そして、本土に接近した9・10番目の地点では三子の景観は失なわれた(第5章)。これらの景観は基本的に地蔵崎と焼火山を結ぶ線上とその附近でのものである。しかし、この線から西に外れた地図(5)Aでも、島前が三子に見ることが明らかとなった(第6章)。さらには地図(4)d・g・h・i・j(h・jは地図(5)Aよりもさらに西方)での漁船上からも、島前が三子に見ることが明らかとなった。

以上の諸地点は、①『風土記』質留比浦(地図(1)19) 以東の海岸から出発して島前に向かって航海する時、②『風土記』美保濱(前編(一)2ページ図(B))を経由して地蔵崎を回り島前に向かう時、③鳥取県の日

古津（・今津（地図(1)26）・御来屋（地図(1)32）、さらにはその西方の赤碕から出発して地蔵崎沖を島前に向かい航海する時、④鳥取県方面から一旦美保関の湊に寄港し、地蔵崎を回って島前に向かう時に通過する地点である。そして、本土から島後に向かって航海する際にもこれらの諸地点、およびその延長線上を通過すれば、島前を三子として見ることができであろう。

八 隠岐海峡に於ける古代の舟運

(1) 古代の日本海舟運

右の「小結」の結論は、島前の三子の景観が地蔵崎の沖合を通過して島前の内海を目指す時に顕著であることを物語っている。地蔵崎の西約2kmにある『風土記』美保濱は、後に美保関として栄えた要衝の港である。しかし、島根県教育委員会（1988・12）は、古代ではまだ重視されていなかったとする。即ち、

島根半島の東端に位置する美保関が、日本海水運の重要な位置を占めるのは中世になってからである。古代においては、『出雲国風土記』にも、「三穂之崎」「美保崎」「美保浜」「美保郷」とあって、舟の停泊などの具体的な記述があるのは雲津・七類・手結・宇竜のみで、美保関にはまったくそうした記述は見えない。美保関の名称も中世になって、ここに水路関が設けられてから地名化したものである。（内田文恵氏担当分）

とする。しかし、私は『風土記』の4浦は、前編(一)（11ペ下段24行目～25行目）に引用した如く、「風待ち風待ちを含めた臨時の港」（日論文38ペ下段1行目～2行目）と推測するものである。4浦は島根半島の北岸だけに記載されており、これらは程度の差はあるが孰れも湾入した入江である。その点で、「可泊」という表現は示唆的だと思う。

『風土記』美保濱に船に関する記載がないからと言って、古代要津で

はなかったとは言えないと思う。『風土記』4浦の記載は、古代の日本海に舟運が栄えたことを暗示するものと考えられる。鹿島町立歴史民俗資料館（1998）によれば、島根県八束郡鹿島町沖からは、

日本海で操業する底曳き網漁船が、しばしば海底に沈んでいた土器を引き上げます。

海上がり（みあ）と呼ばれるこれらの土器は、古代から沖合いを船が行き来していたことを示す重要な証拠です。

海上がり須恵器壺（古墳時代、恵曇沖、館藏品）

海上がり瓦器壺（時代不明、御津沖、館藏品）

海上がり鉄釉瓶（朝鮮、高麗時代、日本海、美保関町爾佐神社（地図(1)12：服部注）蔵）

平成13（01）年11月には、鹿島町御津沖の日本海から昭和60（85）年頃引き上げられた瓦質土器（鹿島町立歴史民俗資料館蔵）が、弥生時代後期末の楽浪郡産であることが判明した。このような文化交流は一方的なものではなかったらしく、中村五郎（2001）は、出雲と朝鮮半島南部間における土器形式の類似性から相互交流の可能性を論じている。島根県（1996）は、土器を含む様々な出土品に着目して、日本海を利用した北部九州から北陸さらにはそれを越えた広い文化交流の存在を指摘しており、鹿島町立歴史民俗資料館（2003）も鹿島町からの出土品等から同様に論じている。

(2) 隠岐海峡に於ける古代の舟運

鳥取県立博物館に隠岐島前北方沖から出土した弥生時代後期の北部九州産の複合口縁壺が所蔵されている。採集地点は「島前三渡灯台の北北西18マイル（北緯36°18'・東経133°46'）、水深260mの泥中だったという。」（常松幹雄〈1994：39〉）。しかも、これと形態的特徴が「九州北部地方の弥生後期の土器と類似しており注目される」とする土器が島根県と鳥取県境の中海に面する安来市カンボウ遺跡（地図(1)21の

ほぼ真南約17km)から出土している(建設省・島根県(1994:81))。類似の壺が新潟県柏崎市開運橋遺跡からも出土しており、福岡市博物館(1998:81)は、対馬海流を利用した土器の移動を示唆する図を掲載する。常松幹雄(1994:44)は、「あえて年代を示せば、隠岐島沖採集壺は2世紀代、開運橋遺跡の壺は1世紀末から2世紀はじめに比定される。東への船出に向け、九州の産物が詰まっていたであろう壺である。」とし、さらに寺沢薫(2000:215-216)は、カンボウ遺跡の壺も含むこれらの土器を、「老岐や対馬の交易民が介在していた可能性が高いと見」る根拠の一つとする。

土器等の大型で重量のある物資を大量に船載するには、大型船が適する。島根県(1999:10)は、「埴輪を基に大きさを復元すると全長12m、50人位の乗船が可能であり、遠洋航海にも充分耐える」船もあったとする。時代は下るが、『日本後紀』延暦18(799)年5月13日の、隠岐国比奈麻治比賣の「常有_二靈驗_一。商賈之輩。漂_二宕海中_一。必揚_二火光_一。頼_二之得_一全者。不_レ可_二勝數_一。」(新訂増補国史大系⁵)は、「古代隠岐国と本土との間を往来する交易船が多数あったことを示している。」(日論文38べ上段12行目-13行目)ものと思う。

右の夜間航海の記事は、夜の陸風を利用した帆装船の存在を暗示するものではなからうか。

(3) 隠岐産黒曜石の分布、並びに丸木舟実験航海(隠岐本土間)

古代の隠岐本土間の舟運が、平城京木簡に見る調の運搬を遙かに溯る昔から活潑に行なわれていたであろうことは、四隅突出型墓(島後、西郷町⁵大城遺跡)の存在、隠岐産黒曜石の広い分布(本土のみならず、朝鮮半島・沿海州からも発見されているという。島根県(2000:3))からも判る。即ち、平野芳英(1986:72)は、藁科哲男氏ほかの螢光X線分析法による隠岐島産の黒曜石の分析結果を纏めて、

時代的には、旧石器時代からすでに久美産の黒曜石は流通をは

じめており、縄文時代全般を通じて、中国地方各地で使用されていたようである。地域的には、東は京都府の丹後町、南は中国山地の観音堂遺跡群ばかりか、山地を越えて広島県の呉市におよび、西は島根県の西部金城町に広がっていることがわかる。量的には、分析結果からすれば、久見(島後五箇村大字久美_三服部)産のものが多く出土しており、黒曜石の供給の主体は久見であったと想像できる。

とする。そして、島根県内で出土した(旧石器時代から)縄文時代を中心とする弥生時代の黒曜石216点を藁科氏に依頼して螢光X線分析を行なった結果、83%が久見産、津井(島後西郷町飯田津井_三服部)産を含めると85%、195個が隠岐島産のものであった(同82べ)。

黒曜石の遺物は島前からも出土し、

島前の郡山遺跡(中ノ島、海士町大字海士郡_三服部)は、島後の久美から海上直線距離で約二八キロメートルあるが、遺跡の立地は島前の内湾に面した小高い丘陵上にある。久美から原石を郡山まで運び込み波静かな内湾を利用すれば島前各地への石器の配給は容易であつたろう。(同79べ-80べ)

とする。そして、美保湾に通ずる島根半島中海_三宍道湖沿岸地域の遺跡を取り上げ、

寺の脇、西川津両遺跡に代表されるように、長期間にわたって営まれており、生活条件的に恵まれていたことは容易に想像できる。そして、生活の中に、黒曜石製石鏃などのいわば生活器財_三の製作・流通基地的な性格も持っていたであろう。黒曜石の流通だけ取り上げても、隠岐島から海上輸送されている訳であるから、寺の脇遺跡、西川津遺跡などから、内海を利用して海上輸送などは、活発に行なわれ、広範囲な地域に隠岐島の黒曜石が普及していったであろう。(同80べ)

と推察する。

昭和56(81)年夏、実験考古学の研究・教育の会「からむし会」

(島根県松江市内)の会員達は、手造りの丸木舟(手漕ぎの5人乗り)に黒曜石を積んで島後西郷港(前編(2)頁(1))を出発し、大森島(同(7)頁)の北を通過、外洋には出ず一旦島前の内海に入り、中ノ島と知夫里島間の海峡「大口」(此処で船は大波を受け、実験航海での難所となった)から知夫里島の郡港(知夫港。同(7)頁)より最終の七類港(同(7)頁D。当初の目的地は八束郡鹿島町惠曇港(松江市島根県庁本庁より北西約8.5km地点であった)に渡った。この間3日、航行時間は24時間48分、隠岐海峡の知夫里島本土間の走行距離は56km、航行時間は12時間43分(時速44km)を要した(からむし会(1988:138))。

実験の結果、丸木舟は横波が入りやすい短所があるものの、復元力が強く安定性があり・大波にも楽に乗れ・進路変更がしやすく・櫂の力が即動力となって速力が出るという利点があり、現在の構造船に決して見劣りしない舟であることが判った(同(7)頁)。隠岐海峡には秒速30cm程度の早さで対馬暖流が流れている(南秀人ほか(1984:124))。しかし、この実験により丸木舟が海流の影響を余り受けにくいという発見もあった、とする。即ち、「海面の潮の向きが必ずしも海流と同じでないこと、そして丸木舟自体水の抵抗が少なく潮の影響を受けにくいことが考えられる。」(同(32)頁)ためという。また、この実験航海に於ける重要な条件は、目的地の方角の景色が見えていることであった、即ち、

私たちに幸運だったことは、本土がよく見えていることであった。隠岐から本土が見えることはめったにないので、私たちはコンパスをたよりに進路をとるつもりであった。しかし、今日は目的地が見えるのだから、櫂をとるのにもずいぶんと助かる。おそらく縄文人も、本土の見えるなぎの日を待って、一気に漕ぎ渡ったのであろう。なによりも、陸が見えているということは、舟を漕ぐものに安心感を与えてくれる。(同(28)頁)

古代人が本土から隠岐島に渡った地点は必ずしも限定されたものではなく、船の大きさや交易の目的地等々により恐らく多様であったろう。

(4) 航海目標としての焼火山と「三子」の景観

島根県教育委員会(1988:74)によれば、江戸時代の役人達の隠岐島前での上陸地は、知夫里島の郡湊が「九〇%を占め」たとし、

島後では「目貫湊」(現在の西郷港)の西隣りに続く「今津湊」(現在の西郷町大字今津)が六〇%、「加茂湊」(現在の西郷町大字加茂)が三五%であり、残る五%が目貫湊及び津戸湊であった。とする。その資料とした「隠岐御役人御更代覚」(島根県(1988))を閲覧したところでは、右の%の根拠が私には十分に理解できないけれども、「御役人」は、代官・郡代・在番(島前・島後)・遠見番・点検役人・徒目附等様々で、その役職や用向きにより本土隠岐島間の航路と着船地は必ずしも固定的なものではなく、島前では中ノ島に着船する場合もあった。

こうして、隠岐海峡の航路の中でもとりわけ地蔵崎沖を通過して島前の内海(焼火山)を目指して進んだ人々が、(36)頁(4)の景観を長時間見続けたことになるのであろう。私はB論文に次の如く書いた。

実際に航海してみても体験したことだが、荒天の際には早く島前に着いてほしいという考えのみが頭の中を占め、島後のことは念頭に浮かばない。島後を意識するようになるのは、穏やかな島前の内海に入ってからのことであった。こうした心理は、小艇を操る古代であれば遙かに切実であったろう。

焼火山が航海の守護神として崇拜されたのも、円錐形の形や、三島並んだ丁度中央に位置することが航路の好目標になったという自然条件に加えて、島前に着くまでの長時間を航海者達と親密に向かい合うところから醸成される、無事の到着を祈りかけ、またそれに見守られているという宗教的感情に基づくものと理解できた。かようにして、人々と向かい合う島前三島の航海中の印象は極めて強いものである。(B論文13ページ1行目〜8行目)

右の宗教的感情の経験は、時化での航海中のことであったが、好天時でも同様に生まれ得たのではないかと推測する。

注

- (1) 『山陰中央新報』(松江市)平成13(01)年11月23日号第1面、「鹿島沖の引き揚げ土器 楽浪郡産と判明 完形品では国内2点目」。鹿島町立歴史民俗資料館(2003・18・24)。同図録では「15世紀の楽浪郡(朝鮮半島)で製作されたと推定される(18頁)とする。
- (2) 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館平野芳英氏より本資料、およびからむし会(1982)・平野芳英(1986)と共に種々ご教示を賜った。記して感謝申し上げる。
- (3) 鳥取県立博物館学芸課岸本浩忠氏より、常松氏論文ほかの資料と共にご教示を賜った。記して感謝申し上げる。
- (4) 島根県古代文化センター松本岩雄氏より、本遺跡と注(5)大城遺跡に関する資料と共にご教示を賜った。記して感謝申し上げます。
- (5) 「色々異なる点もありますが、当時の隠岐の人々が、本土の四隅突出型墳丘墓を強く意識して造ったことは間違いないと思います。」(西郷町文化振興財団(1999))。島根県(2003・160・162)は、大城遺跡のそれを弥生時代後期後葉から後期末葉に位置づける(松本岩雄氏担当)。

引用文献

(ここに掲載した以外にも本文中に記した若干の文献がある。前編(一)「引用文献」に掲載した文献は省略する)

- 安達裕之 1988 安達裕之『日本の船と船編』、日本海事科学振興財団 船の科学館編刊、平成10(98)年、東京。
- 隠岐支庁 1972 島根県隠岐支庁編『隠岐島誌』(復刻版)、名著出版、昭和47(72)年(原本昭和8(33)年島根県発行)、東京。
- 隠岐島前・島後教育委員会 1986 隠岐島前教育委員会・隠岐島後教育委員会編刊『隠岐の文化財』第3号、昭和61(86)年3月、西ノ島町・西郷町。
- 鹿島町立歴史民俗資料館 1994 鹿島町立歴史民俗資料館編展示パンフレット『海の道』コーナー解説)、平成6(94)年3月、八束郡鹿島町大字名分。
- 鹿島町立歴史民俗資料館 2003 鹿島町立歴史民俗資料館編刊『鹿島町立歴史

民俗資料館 2003 年特別展図録『海の記憶―波濤を越えた人々―』、平成15(03)年10月、八束郡鹿島町大字名分。

からむし会 1982 『縄文の丸木舟、日本海を渡る』、縄文時代の一日を再現する会 記録編集委員会(松江市立津田小学校内)編刊、昭和57(82)年、松江。

建設省・島根県 1984 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会編刊『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡―一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ―』、平成6(94)年3月、松江。

近藤 武 1984 近藤 武『隠岐乃民謡』、隠岐民謡協会刊、昭和59(84)年、西郷町。

西郷町文化振興財団 1999 西郷町文化振興財団・隠岐島後教育委員会『大城遺跡 遺跡見学会資料 平成11年4月18日(未公開資料)、平成11(99)年、西郷町。

佐古和枝 1989 佐古和枝編『海と山の王国―妻木晩田遺跡が問いかけるもの』、『海と山の王国』刊行会発行、平成11(99)年、米子。

島根県 1984 『隠岐御役人御更代覚』、島根県編『新修島根県史』史料篇(近世(上)(復刻版)262頁315頁、臨川書店、昭和59(84)年(原本昭和40(65)年島根県発行)、京都)。

島根県 1999 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館編刊『夏季特別展「海」―海流に乗った古代の恋物語』、平成11(99)年、松江。

島根県 2000 島根県埋蔵文化財調査センター編刊『ドキ土器まいぶん』第8号、平成12(00)年1月、松江。

島根県教育委員会 1998 島根県教育委員会編刊『西廻り航路 隠岐航路』(島根県歴史の道調査報告書第7集、平成10(98)年、松江)。

島根県教育委員会 2003 『宮山古墳群の研究』(島根県古代文化センター調査研究報告書16)、島根県教育委員会刊、平成15(03)年、松江。

杉本智彦 2002 杉本智彦『カシミール3D入門』(初版第5刷)、実業之日本社、平成14(02)年、東京。

大山町 1991 『仁王堂遺跡(平第二遺跡)』(大山町文化財発掘調査報告書第11集)、鳥取県西伯郡大山町教育委員会発行、平成3(91)年、大山町。

知夫村 1997 知夫村編刊『知夫村誌』(復刻版)、平成9(97)年(原本昭和35(60)年知夫村発行)、知夫村。

- 常松幹雄 1984 「本州島域における北部九州の壺型土器」『福岡考古』第16号、福岡考古懇話会編刊、平成6（94）年8月、福岡。
- 寺沢薫 2000 寺沢薫『王権誕生（日本の歴史第02巻）』、講談社、平成12（00）年、東京。
- 中村五郎 2001 中村五郎「伽耶と北日本の間―土器編年から見た出雲の王墓の出現その他―」『日本考古学』第11号、日本考古学協会、平成13（01）年5月、東京。
- 名和町 1978 名和町誌編さん委員会編『名和町誌』、名和町発行、昭和53（78）年、名和町。
- 平野芳英 1986 平野芳英「隠岐島産の黒曜石―島根県内出土黒曜石の螢光X線分析から」『山本清先生喜寿記念論集―山陰考古学の諸問題』、山本清先生喜寿記念論集刊行会、昭和61（86）年、松江。
- 福岡市博物館 1998 福岡市博物館編刊『平成10年度福岡市博物館特別企画展 生人のタイムカプセル』、平成10（98）年10月、福岡。
- 文化庁 1982 『全国遺跡地図鳥取県』、文化庁文化財保護部発行、昭和57（82）年、東京。
- 松阪市教育委員会 2001 松阪市教育委員会編『松阪宝塚1号墳調査概報』、学生社、平成13（01）年、東京。
- 南秀人ほか 1984 南秀人・橋木祐一・小西靖・周東健三「隠岐海峡の流況について」『海と空』第59巻第3・4合併号、海洋気象学会編刊、昭和59（84）年5月、神戸。

(続)

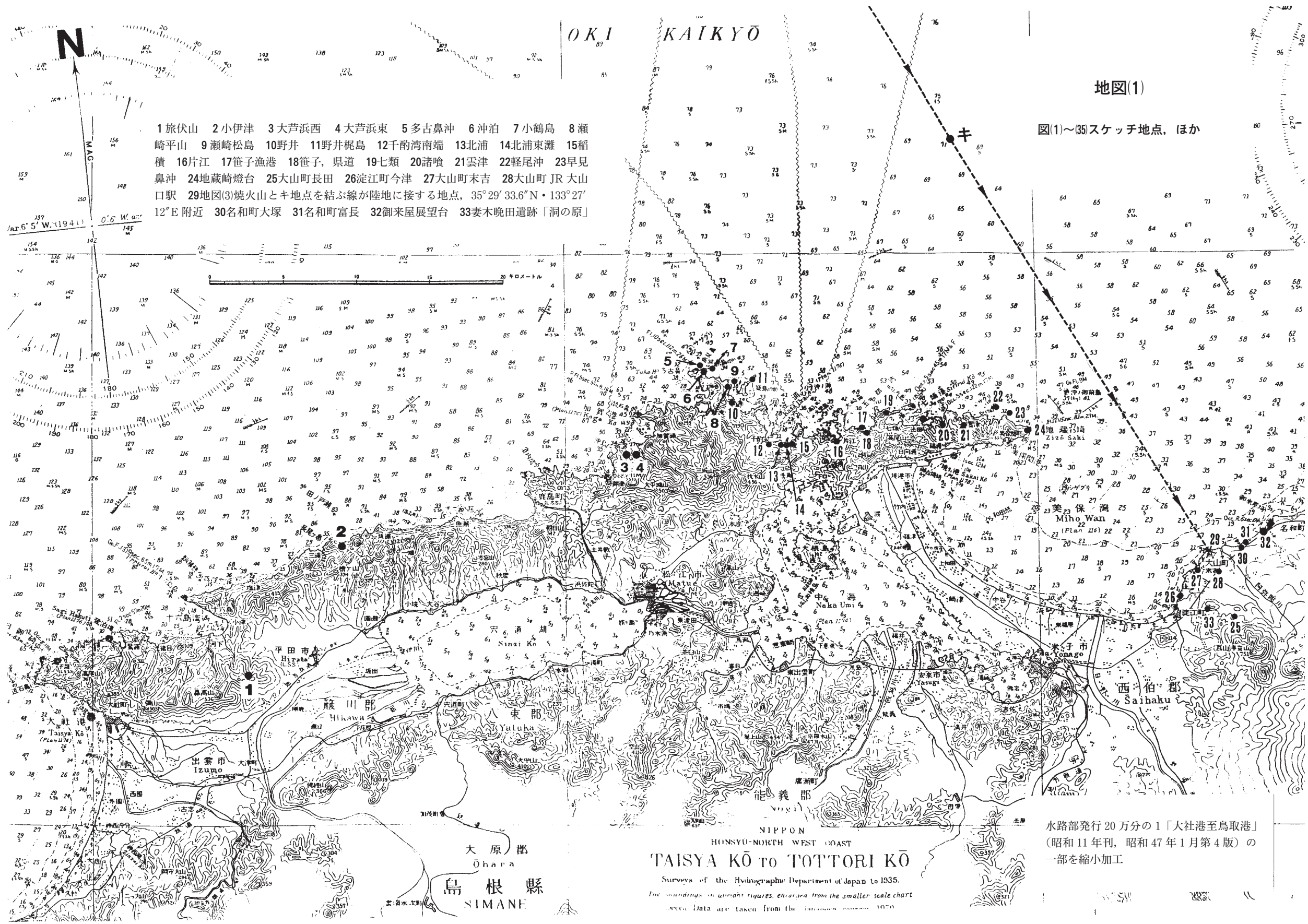
平成15（03）年12月9日受理

OKI KAIKYŌ

地図(1)

図(1)~(35)スケッチ地点、ほか

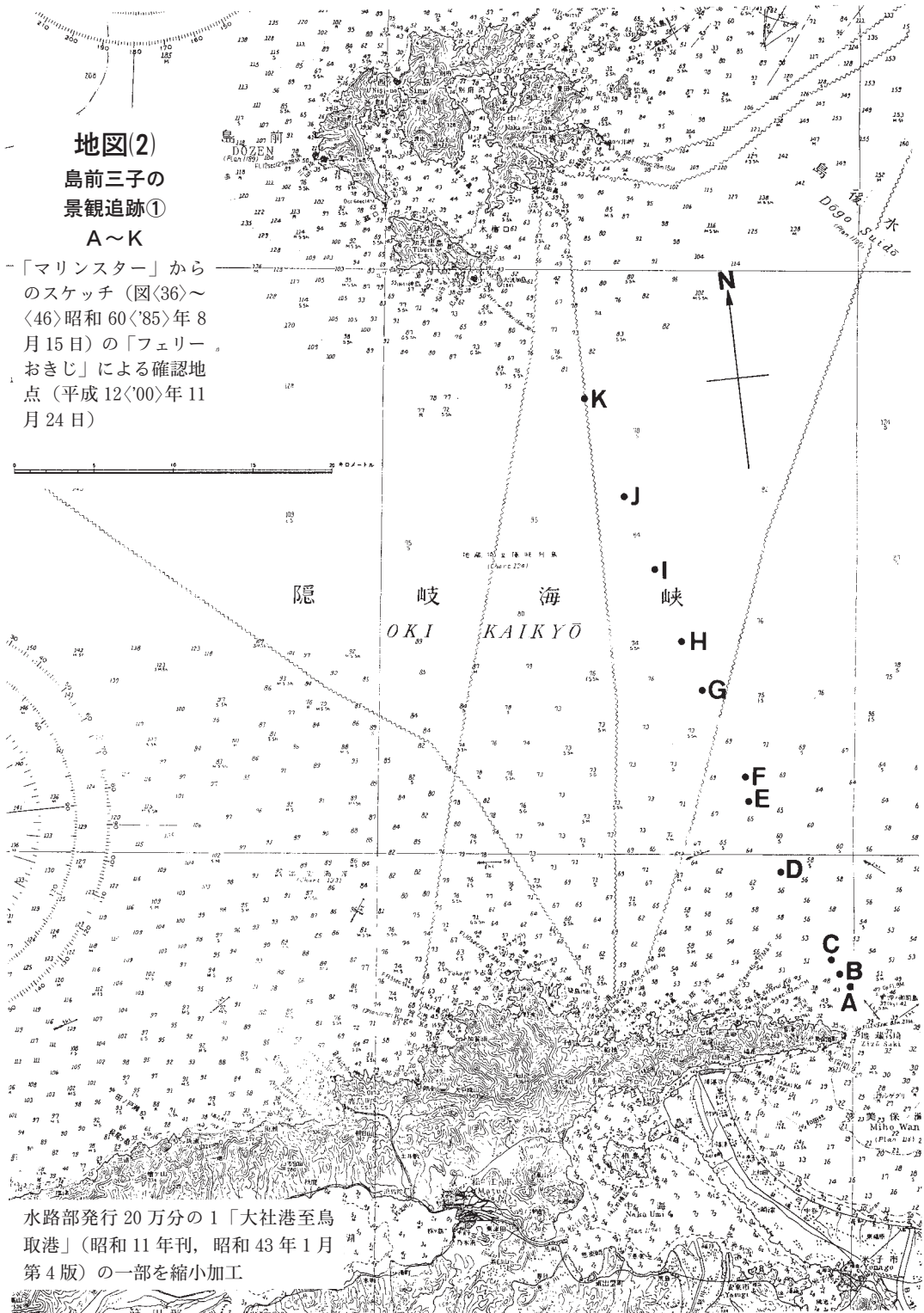
- 1 旅伏山 2 小伊津 3 大芦浜西 4 大芦浜東 5 多古鼻沖 6 沖泊 7 小鶴島 8 瀬崎平山 9 瀬崎松島 10 野井 11 野井梶島 12 千酌湾南端 13 北浦 14 北浦東灘 15 稲積 16 片江 17 笹子漁港 18 笹子、県道 19 七類 20 諸喰 21 雲津 22 軽尾沖 23 早見鼻沖 24 地藏崎燈台 25 大山町長田 26 淀江町今津 27 大山町末吉 28 大山町 JR 大山口駅 29 地図(3)焼火山とキ地点を結ぶ線が陸地に接する地点、35°29'33.6"N・133°27'12"E 附近 30 名和町大塚 31 名和町富長 32 御来屋展望台 33 妻木晩田遺跡「洞の原」



水路部発行 20 万分の 1「大社港至鳥取港」
 (昭和 11 年刊, 昭和 47 年 1 月第 4 版)の
 一部を縮小加工

NIPPON
 HONSHŪ-NORTH WEST COAST
TAISYA KŌ TO TOTTORI KŌ
 Surveys of the Hydrographic Department of Japan to 1935.
 The soundings in aircraft squares, derived from the smaller scale chart
 area. Data are taken from the Japanese survey 1930.

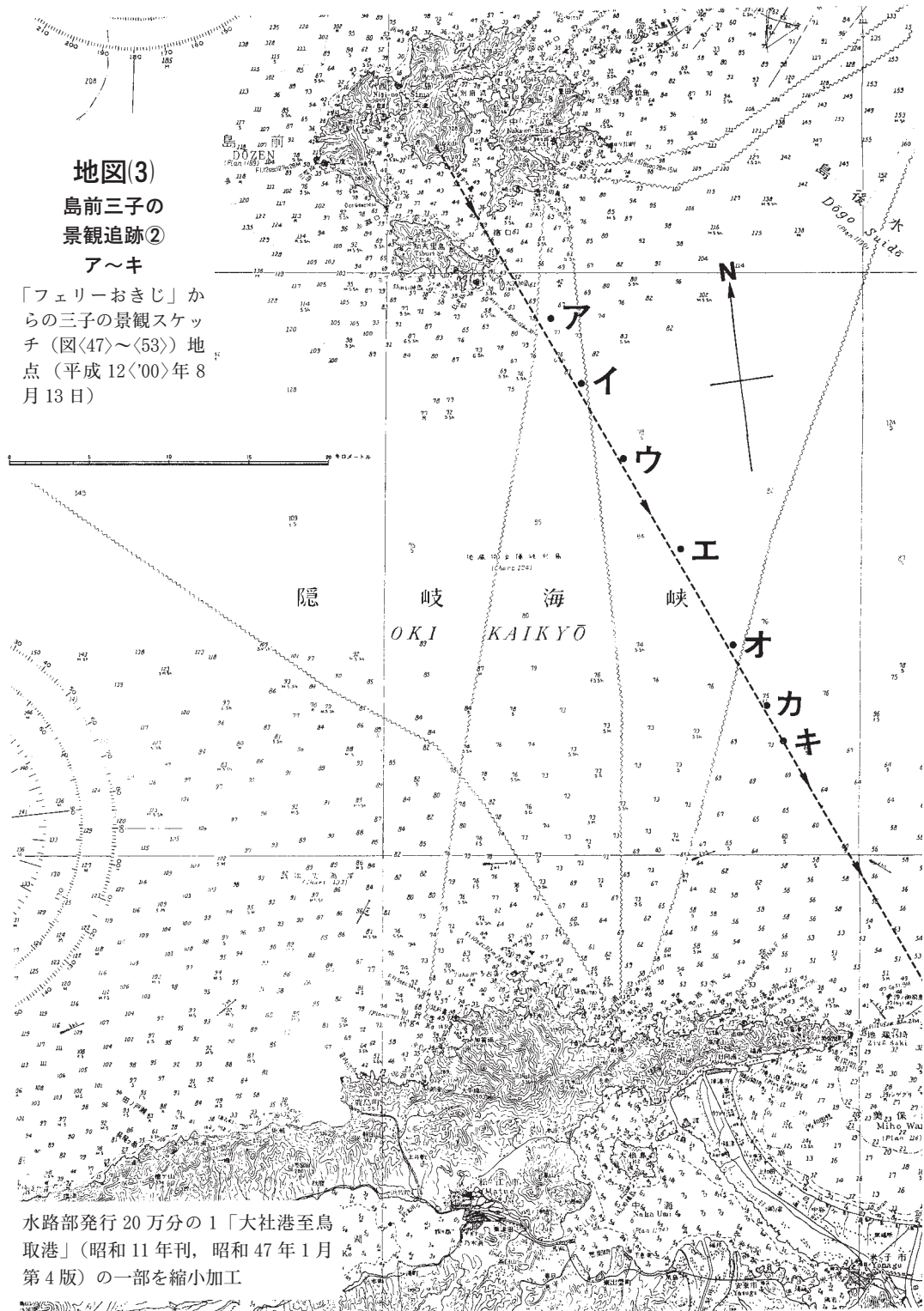
大原郡
 Ohara
鳥根縣
 SIMANE

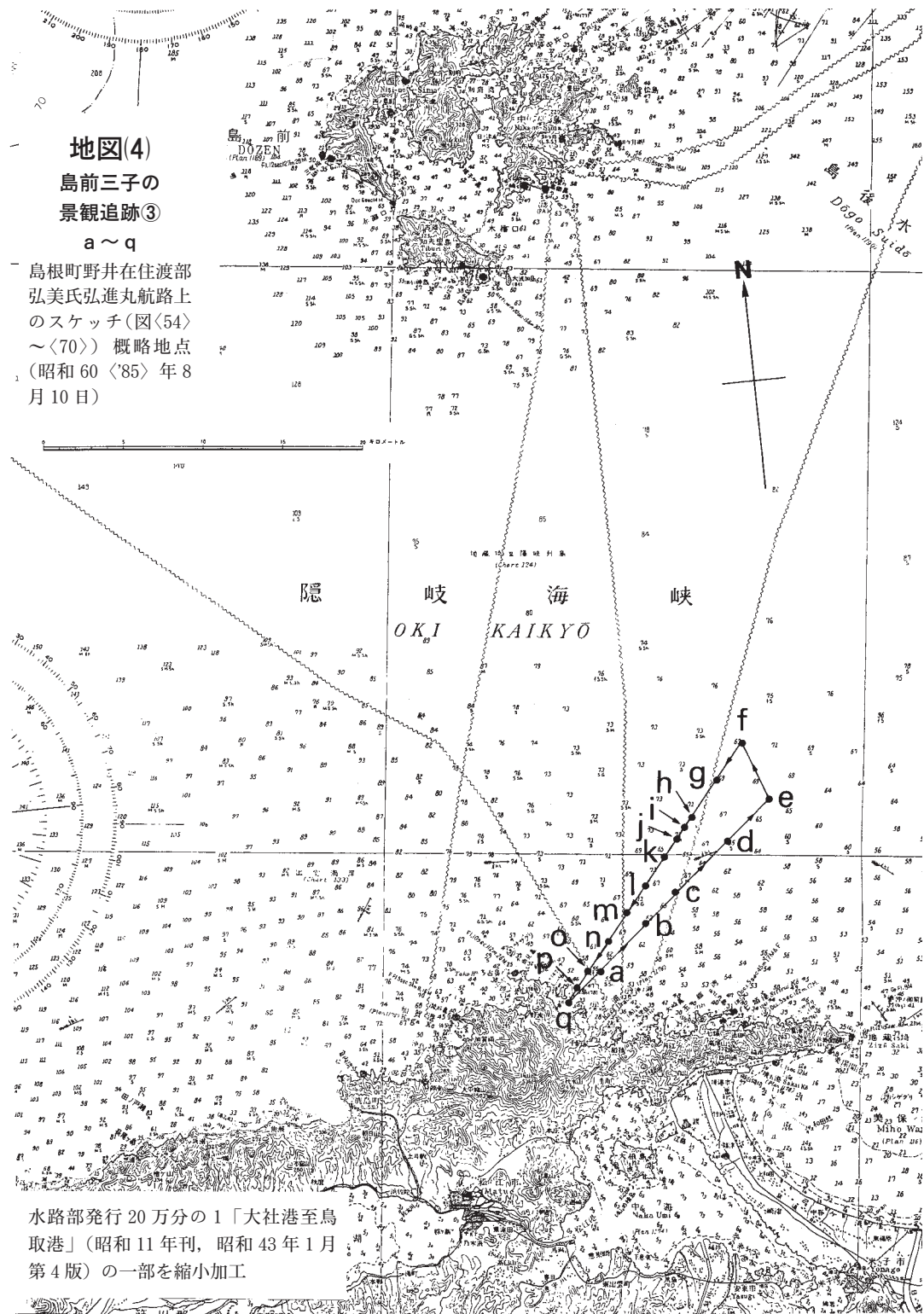


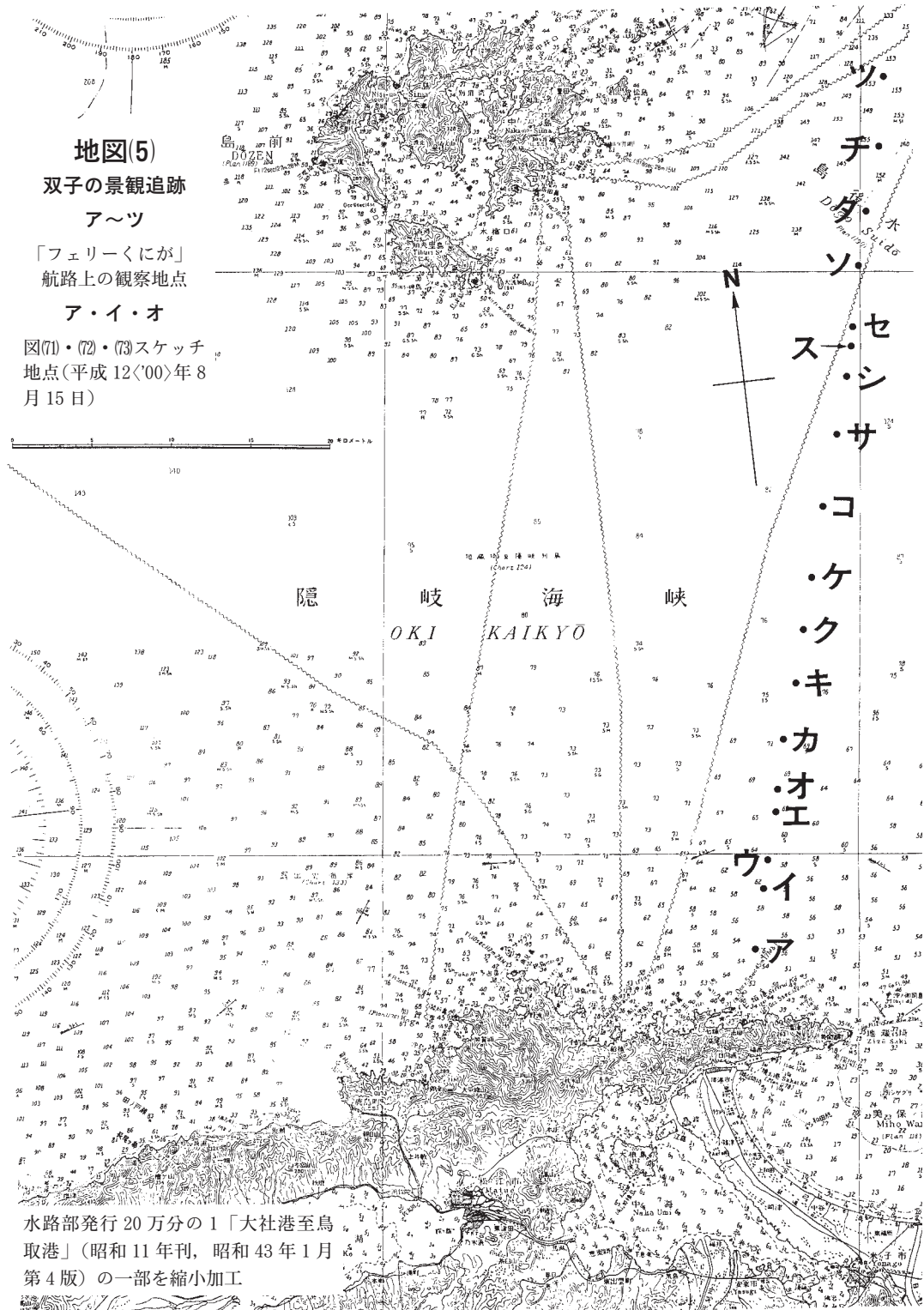
地図(2)
島前三子の
景観追跡①
A~K

「マリンスター」からの
スケッチ(図<36>~
<46>昭和60<'85>年8
月15日)の「フェリー
おきじ」による確認地
点(平成12<'00>年11
月24日)

水路部発行 20 万分の 1「大社港至島
取港」(昭和 11 年刊, 昭和 43 年 1 月
第 4 版)の一部を縮小加工







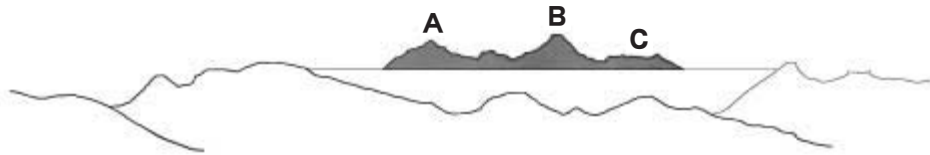
地図(5)
 双子の景観追跡
 ア〜ツ
 「フェリーくになが」
 航路上の観察地点
 ア・イ・オ

図(71)・(72)・(73)スケッチ
 地点(平成12<'00)年8
 月15日)

水路部発行 20 万分の 1 「大社港至鳥
 取港」(昭和 11 年刊, 昭和 43 年 1 月
 第 4 版) の一部を縮小加工

図(1) 旅伏山山頂より島前を望む

平成 8 ('96) 年 7 月 30 日 午前 11 : 05
 標高 450 m
 地図(1) 1 地点附近 (都牟自神社の西約
 150 m) 展望台より
 快晴



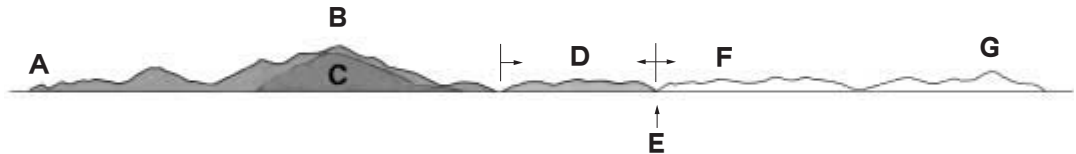
島前は三子に見えない
 島後は島前の蔭になる
 知夫里島の赤禿山は B の手前に重なる
 旅伏山への烽連絡は 焼火山が最適
 仁多町在住井上勝博氏スケッチ
 A ~ C の比定は井上氏

A 西ノ島の西部 (国賀方面か? カシミールでは国賀附近)
 B 西ノ島焼火山
 C 知夫里島の東部 (図<2>によれば中ノ島か? …服部 カシミールでは中ノ島と思われる)
 以下 カシミールでのデータは島根県中山間地域研究センター主任研究員森 永壽氏による

図(2) 平田市小伊津町海岸中腹より島前島後を望む

平成 12 ('00) 年 7 月 29 日 午前
 標高 40 m (小伊津漁港の金毘羅社南方約 60 m)
 地図(1) 2 地点附近
 晴

三子 双子の景観なし



島前島後が一続きとなる
 知夫里島が西ノ島と重なる
 B 焼火山と C 赤禿山とは高さもほぼ同じとなる

小伊津町在住金築 一氏スケッチ
 A ~ G の比定は金築氏

A 西ノ島^{みたべ}三度崎
 B 西ノ島 (頂点は焼火山)
 C 知夫里島赤禿山 (知夫里島の範囲不明確)
 D 中ノ島^ま
 E 島後都万村那久崎?
 F 島 後
 G 大満寺山
 (A ~ G の比定はカシミールでも同じ)

図(3) 島根町大芦，大芦海岸「浜西」県道上より島前を望む

昭和 62 (’87) 年 8 月 1 日 午前
 標高約 4.8 m
 地図(1) 3 地点
 晴

三子 双子の景観なし



大芦浜西からは島後は見えない
 B C の比定は知夫村収入役
 影原正美氏

- A 黒島 (『風土記』黒嶋)
- B 西ノ島の西南部 (カシミールでも同じ)
- C 知夫里島と西ノ島が重なる
- D 馬島 (『風土記』眞嶋)

図(4) 島根町大芦，大芦海岸「浜東」県道上より島前を望む

昭和 62 (’87) 年 8 月 1 日 午前
 標高約 4.8 m
 地図(1) 4 地点 日石給油所前
 晴



大芦浜東からは島後は見えない
 B C E の比定は知夫村収入役
 影原正美氏

- A 黒島 (『風土記』黒嶋)
- B 西ノ島の西南部 (カシミールでも同じ)
- C 西ノ島の西南と知夫里島西端の低地が重なりつつ水没
- D 知夫里島赤禿山? (カシミールでも同じ)
- E 知夫里島と西ノ島が重なる
- F 馬島 (『風土記』眞嶋)

図(5) 島根町多古，多古鼻燈台の北北東 470 m 海上から島前島後を望む

昭和 60 (85) 年 8 月 11 日午前
 島根町野井 渡部弘美氏弘進丸甲板
 (海面からの高さ約 0.4m) より
 地図(1)5 地点附近
 晴

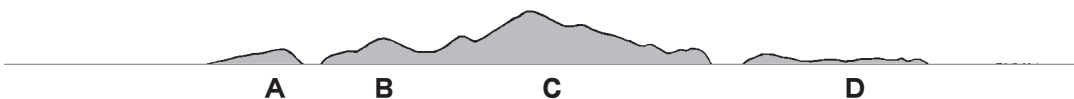


ABC 一体となる 三子の印象なし
 双子の印象あり

- A 知夫里島の西南端部 (カシミールでは西ノ島の西南部)
- B 知夫里島と西ノ島一体化
- C 中ノ島 (カシミールでも同じ)
- D 島 後

図(6) 島根町沖泊漁港，種子島防波堤上より島前を望む

昭和 60 (85) 年 8 月 11 日午後 0 : 20
 標高約 2 m ?
 地図(1)6 地点附近
 晴



三子の印象弱し

- A 知夫里島の西南端部 知夫赤壁
 方面? 図(3)(4)からすれば西ノ島の西南部? (カシミールでは西ノ島の西南部)
- B 知夫里島 頂点は赤禿山
- C 西ノ島 頂点は焼火山
- D 中ノ島

図(7) 島根町多古, 小鶴島の北 10 m から島前を望む

昭和 60 (85) 年 8 月 11 日 午前
 島根町野井 渡部弘美氏 弘進丸甲板
 (海面からの高さ約 0.4 m) より
 地図(1) 7 地点 附近
 晴

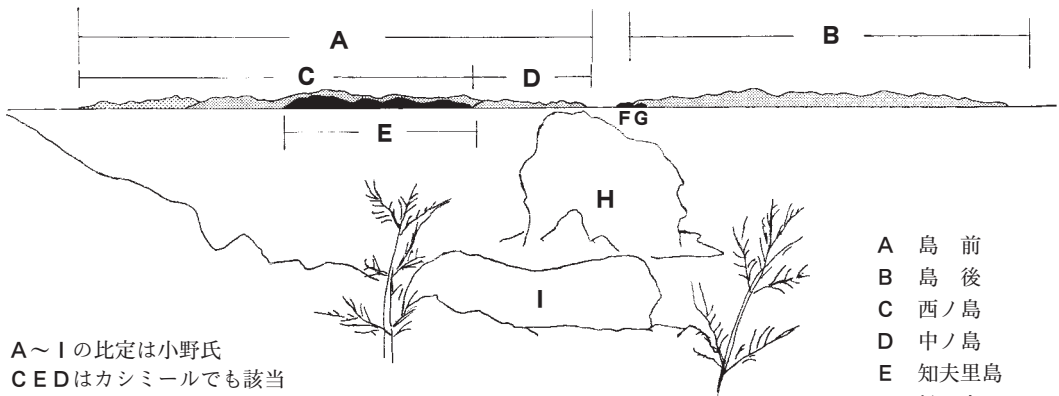


地蔵崎から焼火山に向かう航路以外では
 この地点からが最も三子に近く見えた
 しかし, ADの量感は不足する 三子に
 見ようとすれば見える程度 であろう

- A 知夫里島の西南部 知夫赤壁方
 面? (カシミールでは西ノ島の
 西南部)
- B 知夫里島 赤禿山
- C 西ノ島 焼火山
- D 中ノ島

図(8) 島根町瀬崎, 平山中腹より島前島後を望む

昭和 60 (85) 年 5 月 8 日 午後 6 : 00 ~ 6 : 30
 標高 約 40 m
 地図(1) 8 地点 附近
 天候 快晴無風
 瀬崎在住小野啓次郎氏スケッチ



A ~ I の比定は小野氏
 CEDはカシミールでも該当

- A 島 前
- B 島 後
- C 西ノ島
- D 中ノ島
- E 知夫里島
- F 松 島
- G 大森島
- H 松 島
ましま
- I 馬 島

図(9) 島根町瀬崎，平山頂上西北より島前を望む

昭和 60 (85) 年 3 月 20 日午後
 標高約 60 m (頂上の北西約 35 m)
 地図(1) 8 地点附近
 晴



三子の景観なし

A B C 重なる
 島後は霞んで見えない

- A 知夫里島 頂点は赤禿山
- B 西ノ島 頂点は焼火山
- C 中ノ島

図(10) 島根町瀬崎，松島南西約 50 m 海上より島前を望む

昭和 59 (84) 年 8 月 15 日午後
 島根町野井 渡部弘美氏弘進丸甲板
 (海面からの高さ約 0.4 m) より
 地図(1) 9 地点附近
 晴



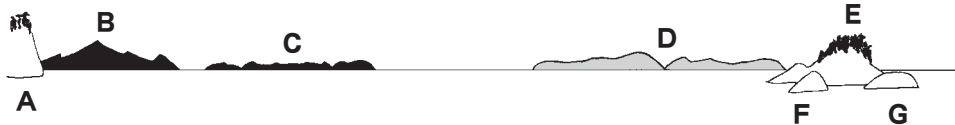
三子の景観なし

B C 一体化 中ノ島 (と西ノ島の高所?)
 は水没して D E F の高所のみが見える
 島後は霞み不明瞭

- A 知夫里島の西南端部 知夫赤壁
 方面? (カシミールでは西ノ島
 の西南部)
- B 知夫里島 頂点は赤禿山
- C 西ノ島 頂点は焼火山
- D ~ F 中ノ島 (カシミールでは西
 ノ島の高所も見える?)

図(11) 島根町大字野井, 野井^{じかた}バス停前より島前島後を望む

昭和 60 ('85) 年 8 月 17 日 朝
 標高 4.2 m
 地図(1)10 地点附近
 晴



三子の印象なし

B C D 三つになるが C の量感は小さく D は遠いため 三者には対等の量感・一体感は感じられない

- A 島根町瀬崎 松島
- B 西ノ島
- C 中ノ島
- D 島 後
- E 横 島(ハデ島とも)
- F 雀 島
- G 二子島
- F G の地名は『島根町誌』による

図(12) 島根町大字野井, 梶島の洞窟を北に抜け出た地点の海上より島前島後を望む

昭和 60 ('85) 年 8 月 9 日 午前
 弘進丸甲板 (海面からの高さ約 0.4 m)
 より
 地図(1)11 地点附近
 晴



三子 双子の景観なし

- A 知夫里島の南西端 知夫赤壁方面? (カシミールでは西ノ島の西南部)
- B 知夫里島 頂点は赤禿山
- C 西ノ島 頂点は焼火山
- D 中ノ島 大部分が水没 (西ノ島の高所も見える?)
- E 島 後

図(13) 美保関町千酌湾南端より島前を望む

昭和 59 ('84) 年 12 月 7 日 午後 3 : 10 頃
 標高約 0.4 m
 地図(1)12 地点附近 (千酌湾南端の砂浜
 県道から続くコンクリート舗装の道を
 降りた地点)



島後は湾の中央付近に見えるが 今
 日は見えない

千酌在住松本昭男氏スケッチ

- A 笠浦 津ノ和鼻
- B 西ノ島
- C 笠浦 黒島 (『風土記』黒嶋)
- D 中ノ島
- E 稻積 卷ヶ鼻
- A～Eは松本氏の比定

図(14) 美保関町北浦 165 番地(「西灘」)鈴木清氏宅前(北)より島前を望む

昭和 60 ('85) 年 8 月 15 日 午前
 標高約 2 m
 地図(1)13 地点附近
 晴



A・B・C・Dで三子の印象なし
 島後は奈倉鼻に遮られて見えない

- A 知夫里島の西南端部？西ノ島西南部？(カシミールでは西ノ島の西南部)
- B 知夫里島 頂点は赤禿山
- C 西ノ島 頂点は焼火山
- D 西ノ島

図(15) 美保関町北浦「東灘」砂浜東端より島前を望む

昭和 60 ('85) 年 8 月 15 日
 標高約 1 m
 地図(1)14地点附近
 晴

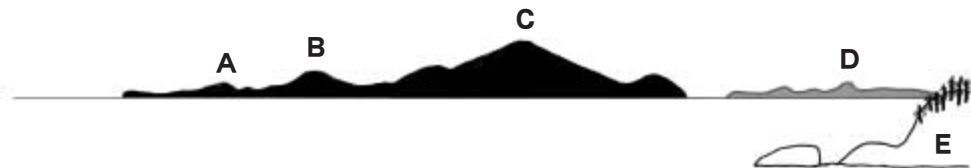


A B間が離れるが A B Cに三子の印象はない 東灘からは島後は見えない

- A 知夫里島の西南端部？西ノ島西南部？（カシミールでは西ノ島の西南部）
- B 知夫里島 頂点は赤禿山
- C 西ノ島 頂点は焼火山
- D 中ノ島？

図(16) 美保関町稲積字横手「横手墓地」より島前を望む

昭和 60 ('85) 年 8 月 15 日
 標高約 15 m
 地図(1)15地点附近
 晴



A B Cが合体する
 双子・三子の景観なし

- A 知夫里島の西南端部？西ノ島西南部？（カシミールでは西ノ島の西南部）
- B 知夫里島 頂点は赤禿山
- C 西ノ島 頂点は焼火山
- D 中ノ島
- E 古浦ヶ鼻（稲積湾）

図(17) 美保関町片江，片江湾中央県道上より島前を望む

昭和 60 ('85) 年 8 月 17 日 夕方
 標高約 5m (一畑バス車内より)
 地図(1)16 地点附近
 晴



A B 連結 三子の印象なし 島後は片江湾
 内からは見えない

- A 知夫里島 頂点は赤禿山
- B 西ノ島 頂点は焼火山 中ノ島も重なる？
- C 中ノ島

図(18) 美保関町笹子漁港北西端より島前島後を望む

昭和 59 ('84) 年 7 月 30 日 午前
 標高約 2m
 地図(1)17 地点附近
 快晴

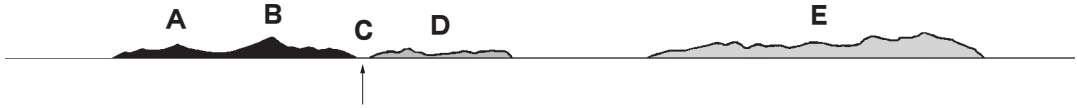


A B 間が切れ (水没) 島前は A B C の三つの
 島影となるが C はほとんど水没して三子の
 印象なし A B D とでも三子の印象はない
 双子の印象なし

- A 知夫里島
左端は西ノ島の西南部？
- B 西ノ島
- C 中ノ島？ (西ノ島の高所？カシミールでは中ノ島)
- D 島 後

図(19) 美保関町笹子，県道より島前島後を望む

昭和 59 (84) 年 7 月 30 日 午前
 標高約 30 m
 地図(1)18 地点附近
 快晴



三子の景観なし

島影は三つであるが A・B・D・E は
 大きさも異なり 対等の量感にならな
 い E は遠い

- A 知夫里島
- B 西ノ島 頂点は焼火山
- C 切れて見える
- D 中ノ島
- E 島 後

図(20) 美保関町七類港日本海側海岸より島前島後を望む

昭和 59 (84) 年 7 月 30 日 午前
 標高 10 m ?
 地図(1)19 地点附近
 晴



三子の景観なし

島前 A・B は接する A・B・C で 3 島に見
 えるが A・C の量感が小さく三子の印
 象なし

島前と島後はほぼ近い量感となるが
 島後が遠いため双子の印象なし

- A 知夫里島
- B 西ノ島
- C 中ノ島 (西ノ島東北部と重なる?)
- D 島 後

図(21) 美保関町諸喰漁港西端，公民館前より島後を望む

昭和 59 ('84) 年 12 月 20 日頃
標高約 2.0 m
地図(1)20 地点
晴



諸喰漁港からは 島前島後一度に見えない
双子の景観なし
諸喰故伊田喜雄氏スケッチ

A 大峯山？（カシミールでは横尾山）
B 大満寺山

図(22) 美保関町諸喰漁港東端より島前を望む

昭和 59 ('84) 年 12 月 20 日頃
標高約 1.0 m
地図(1)20 地点
晴



諸喰漁港からは 島前島後は一緒に見えない
島前三子の印象なし
諸喰故伊田喜雄氏スケッチ

A 知夫里島 頂点は赤禿山
B 不明
C 西ノ島 頂点は焼火山
D 中ノ島？（カシミールでは中ノ島）

図(23) 美保関町雲津湾内，公民館北西波打際より島前を望む

昭和 60 ('85) 年 8 月 17 日 午前
 標高 0.5 m
 地図(1)21 地点 (字横手)
 晴



三子の景観なし
 島後は雲津湾内からは見えない

- A 知夫里島
- B 西ノ島
- C 中ノ島の一部 (カシミールでは西ノ島の高所?)
- D 中ノ島の一部 (カシミールでは西ノ島の高所?)

図(24) 美保関町軽尾，軽尾漁港北北東 1.2 km 海上より島前島後を望む

昭和 60 ('85) 年 8 月 17 日 午後
 雲津在住故榎岡豊吉氏豊漁丸甲板 (海面からの高さ約 0.8 m) より
 地図(1)22 地点
 晴



A B Dで三子の印象なし
 島前島後双子の印象なし

- A 知夫里島
- B 西ノ島
- C 中ノ島 (カシミールでは中ノ島の高所?)
- D 島 後

図(25) 美保関漁港北側日本海岸, 早見ヶ鼻東北東 550 m 海上より
島前島後を望む

昭和 60 ('85) 年 8 月 17 日午後
豊漁丸甲板 (海面からの高さ約 0.8 m)
より
地図(1)23 地点附近
晴



A・B・Eで三子の印象なし
A BとEで双子の印象なし

- A 知夫里島
- B 西ノ島
- C 中ノ島
- D 中ノ島? (カシミールでは西ノ島?)
- E 島 後

図(26) 地蔵崎燈台ビューッフェ西隣空地より島前島後を望む

三子の景観なし
島後は遠いが 双子に見えないこともない

平成 12 ('00) 年 7 月 31 日午後 2 : 30
標高約 70 m
地図(1)24 地点
曇



西ノ島の一部BがAと繋がる

- A 知夫里島 頂点は赤禿山?
- B 西ノ島
- C 西ノ島 焼火山
- D 西ノ島
- E 西ノ島の高所が中ノ島と重なる
- F 同
- G 中ノ島
- H 松 島 (カシミールでも該当)
- I 大森島 (カシミールでも該当)
- J 大峯山? (カシミールでは横尾山)
- K 島 後
- L 大満寺山

図(27) 鳥取県大山町長田集落入口から北西 100 m 農道上より島前を望む

隠岐方面水蒸気のため 見通し不良
島後は水蒸気のため 見えない

平成 12 (00) 年 7 月 28 日 午前 11 : 15
標高 75 m
地図(1)25 地点
快晴
双眼鏡によるスケッチ



三子 双子の景観なし

- A 知夫里島？（カシ米尔では知夫里島）
- B 大波加島？西ノ島の一部？（カシ米尔では知夫里島の高平山と西ノ島の茶釜山とが繋がる）
- C 西ノ島 焼火山
- D 西ノ島の高所が中ノ島と重なる？（カシ米尔でも重なる Dは西ノ島の高崎山）
- E 中ノ島？西ノ島と重なる？（カシ米尔では中ノ島と西ノ島が重なる）

図(28) 鳥取県淀江町今津, ^{むき}妻木川川口右岸休憩所(東屋式)より島前島後を望む

見通し不良のため スケッチは不完全

平成 12 (00) 年 7 月 31 日 午後 3 : 50
標高約 3 m
地図(1)26 地点
曇（遠方時折雨）
視界不良



島影は三つであるが A・B・C・Dの量感に差があり また Dは遠く三子の景観なし
双子の景観なし

- A 知夫里島？（カシ米尔では知夫里島）
- B 焼火山？（カシ米尔では焼火山）
- C 西ノ島と中ノ島が重なる？中ノ島は水没？（カシ米尔では中ノ島は水没）
- D 島 後

図(29) 鳥取県大山町末吉海岸より島前を望む

遠方海上は水蒸気のため 見通し不良
島後は水没もしくは水蒸気のため 見えない

平成 12 (00) 年 7 月 28 日 午前 10 : 35
標高約 5 m
地図(1)27 地点
快晴
双眼鏡によるスケッチ



三子の景観なし

- A 知夫里島？（カシミールでは知夫里島）
- B 西ノ島 焼火山
- C 中ノ島は水没し 西ノ島の高所が見える？（カシミールでは西ノ島の高所）

図(30) 鳥取県大山町 JR 大山口駅ホームより島前島後を望む

隠岐方面水蒸気のため 見通し不良

平成 12 (00) 年 7 月 28 日 午前 10 : 45
標高約 26.5 m
地図(1)28 地点
快晴
双眼鏡によるスケッチ



三子の景観なし
双子の景観なし

- A 知夫里島？（カシミールでは知夫里島）
- B 西ノ島 頂点は焼火山（カシミールでも該当）
- C 中ノ島に西ノ島の高所が重なる？（カシミールでは中ノ島は水没し 西ノ島の高所のみとなる）
- D 島 後（カシミールでも該当）

図(31) 名和町大塚字大雀, 国道9号線南接崖上より島前島後を望む

隠岐方面水蒸気のため 見通し不良

平成12(00)年7月28日午後0:06
 標高20m
 地図(1)30地点附近
 快晴
 双眼鏡によるスケッチ



Eは遠く A・B・C・Eの量感に差があり
 三子の景観なし
 双子の景観なし

- A 知夫里島? (カシミールでは知夫里島)
- B 西ノ島 焼火山
- C 西ノ島が中ノ島に重なる? 西ノ島の高所? (カシミールでは中ノ島は水没し 西ノ島の高崎山附近が見える)
- D 松島? (カシミールでは松島ではない 中ノ島の唯山附近か)
- E 島 後

図(32) 名和町富長, 国道9号線日本料理「あんこう」土手より島前島後を望む

隠岐方面水蒸気のため 見通し不良

平成12(00)年7月28日午前8:30頃
 標高約10m
 地図(1)31地点
 快晴



淀江町小波在住遠藤師夫氏スケッチ
 (粗描)に基づき図化
 図(31)の東北東約240m
 A~Dの比定は服部

- A 知夫里島? (カシミールでは知夫里島)
- B 西ノ島と中ノ島? (カシミールでは重なる)
- C 松島? (右にもう一つかすかに島影が見えたと言われる) 中ノ島の一部? (カシミールでは松島は水没 中ノ島の高峯と家督山附近)
- D 島 前

図(33) 名和町御来屋，国道9号線附近「御来屋展望台」より島前島後を望む

隠岐方面水蒸気のため 見通し一層不良

平成12(00)年7月28日午後0:40
 標高5m~10m
 地図(1)32地点
 快晴
 双眼鏡によるスケッチ



三子の景観なし
 双子の景観なし
 快晴でも隠岐島が良く見えることはほとんどない(平成12(00)7月28日~8月21日の間でこの1日のみ)

- A 知夫里島
- B 西ノ島 焼火山
- C 西ノ島?中ノ島が重なる?(カシミールでは中ノ島水没 西ノ島のみ)
- E 島 後

図(34) 大山町^{むきぼんだ}妻木^{どうはら}晩田遺跡最南西地点(洞の原地区)より島前島後を望む(参考)

1年振りに隠岐が姿を見せる(遠藤師夫氏)

平成13(01)年8月31日午前10:15~10:30
 標高90m(島前)と標高75m(島後)からの合成
 地図(1)33地点
 晴(前日は雨天)



淀江町小波在住遠藤師夫氏スケッチ(粗描)に基き図化
 三子 双子の景観は意識して見なかったため不明(遠藤氏)
 A~Cの比定は服部
 スケッチ地点と標高の確認は鳥取県教育委員会妻木晩田遺跡現地事務所内田浩文氏(遠藤氏と同行)による

- A 知夫里島
- B 西ノ島と中ノ島が重なる?(カシミールでは重なる)
 A B間が切れるのは見通し不良のため?(カシミールでは繋がる)大森島は見通し不良のため見えない?(カシミールでは水没する)
- C 島 後

図(35) 大山町妻木晩田遺跡洞の原地区北部より島前島後を望む(参考)

平成 13 ('01) 年 11 月 21 日午後 1 : 21 ~ 1 : 22

標高 90 m

地図(1)33 地点

晴



妻木晩田遺跡現地事務所内田浩文氏撮影(デジタルカメラ)のCDを大妻女子大学メディアセンターが解像服部が図化

三子の景観なし

内田浩文氏の印象は「島前島後の量感是对等でなく島後の方が少し大きい 島前が濃く 島後は薄くぼんやりしている 島前島後間に距離があるため 仲良く並ぶとか連れ添っているというのではなく 少し離れて横に並んでいるという感じである」という

A~Hの比定は服部

- A 知夫里島
- B 大波加島? (カシミールでは知夫里島の高平山)
- C 竹島? (カシミールでは高平山の北続き 標高 100 m の峰)
- D 西ノ島 焼火山
- E 西ノ島と中ノ島が重なる? (カシミールでも重なる Eは中ノ島の熊野山附近)
- F 松島? (カシミールでは中ノ島海士町豊田港東南 500 m の峰)
- G 島 後
- H 島 後 大満寺山 (カシミールでも大満寺山)